
一色

相原ミヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一色

【Nコード】

N2341X

【作者名】

相原ミヤ

【あらすじ】

世界は色で満ちている。全ての生き物は己の色「一色」を持つ。色は力であり、色の力を発揮する色の石が存在する。色によって力が異なり、国は色を使って覇権を争う。ここは火の国。火の国には赤を司る色神紅があり、紅の生み出す紅の石によって豊かな国を作り出している。紅の石は赤色の力を発揮することができ、赤の力は熱を基本としたエネルギー。紅の石を使うことが出来る者を術士という。火の国の住民は皆、石を使う適性検査——選別を受けることが義務付けられている。術士に憧れを抱く十六歳の悠真であったが、

術士の才覚に恵まれず小さな漁村で生活していた。しかし、色神紅に敵対する官吏の争いに巻き込まれ、悠真の人生は大きく変わる。美しい色神紅と彼女を守る術士たちと出会い悠真は自らの色に気づいていく。

始まりの赤（1）

世界は色で満ちている。

八百万の色。

全ての生き物は己の色「一色」を持つ。

同じ色の無い一色。

それは人も然り。

色は力。

色は時に心さえ操る。

悲しみの色。

強さの色。

慈しみの色。

世界は色で守られている。

最も美しいのは何色か。

色たちは覇権を奪い合う。

決して終わることの無い色の戦い。

色は人を選び色を与え色神に変えた。

色神は石を生み出せる神に等しき存在。

色神が守る国は豊かとなる。

ここは海に浮かぶ島国。

火の国。

火の国には色神様がいる。

色神様は、司る色の石を生み出す。

火の国は、赤い国。

色神様の名は紅。

紅様は紅の石を生み出す。

紅の石は不思議な力を持つ。

火の国で最も偉大で、最も尊い紅。

この国で最も尊き色は赤。

潮の匂いが心地いい。波は砂浜に打ち寄せ、下がる。浜辺に木の船が上がり、甲板には魚が跳ねる。小さな漁村には何も無い。海岸に沿った家と、船乗りたちに道を示す灯台。山の子供が海に遊びに来て、手習いを教える塾は賑った。住まう人は温かい。捕れた魚を市街へ売りに行き、米や野菜を手に入れる。海岸沿いは山が連なり、畑を作るのには適さないが、豊かな里山は木の実や山菜の恵みを漁村にもたらず。時には、罨に猪がかかった。飼っている鶏は卵を産む。ここは、何も無いが恵まれた漁村。漁村には下緋がいる。下緋は、紅の石を使うことが出来る術士のこと。小さな漁村に、普通はいない術士。術士がいるのは、この漁村に灯台があるから。灯台が船に道を知らせるから。

紅の石は、強大な力を生む。光を生み、熱を生み、動力を生む。

紅が生み出す色の石。その石があるから、色神が国にいるから、火の国は豊かだ。外国も侵略することが出来ない。小さな島国が豊かさを続けることが出来るのは、一重に紅様のおかげなのだ。

悠真は漁村で生まれ育った。漁師の息子らしく、海で泳ぎ、山野を駆けた。ふんどし一枚で海に飛び込み、草履を脱ぎ捨てて砂浜を駆けた。洗いざらしの紺の着物に、結わえるのが面倒だからと髪は短く切っていた。悠真の祖父は漁師だ。父も漁師だったらしいが、悠真は父のことを覚えていない。悠真が三歳の時に海に吞まれて死んだのだ。祖父は悠真に言った。海の神の元へと帰ったのだと。だから海を恐れるなど。悠真の母は、悠真が五歳の時に死んだ。母が死んだ時のことは覚えている。母は風邪で寝込み、そのまま死んだ。こうして悠真は祖父と二人きりになった。

父と母がおらずとも、悠真は平気だった。祖父と一緒に海に出て

魚を捕る日々。読み書きも出来た。元来器用な悠真は、字が美しいと褒められた。年の近い女の子から声をかけられれば嬉しい。子供たちの相手をするのも楽しい。何より、酒を飲み上機嫌になった祖父の話聞くのが楽しかった。上機嫌になった祖父は禿げた自分の頭を撫でながら、悠真の知らない父や母の話をした。悠真の中の父や母の記憶はそうにして作られていった。そして、祖父と一緒に酒を酌み交わすのは、灯台を守る術士だった。

灯台を守る術士の名は「惣次」という。五十歳ほどの男だ。二年前に、この村に配属されてから、悠真は時間があれば遊びに行った。十六歳になる悠真にとって、紅の石を使うことができ、紅に近い存在に興味があったのだ。そして、色神紅が生み出す紅の石にも興味があった。紅の石を使うことが出来る術士になるには、生まれながらの才覚を要す。火の国に生まれた子供は、数え年が十になると否応なしに適性検査——選別を受ける。紅の石に見定められるのだ。残念なことに、悠真に術士の才覚は無かった。

惣次が悠真に話すことはとても興味深いことだった。紅を守る軍を朱軍、朱軍をまとめる將軍を朱将と言う。紅の護衛を朱護と言う。術士は緋の字を与えられ、術士の頂点に立つただ一人の存在「陽緋」。陽緋について、灯緋、大緋、中緋、小緋、下緋と続く。惣次は、術士の中でも最も下の下緋だ。しかし、悠真に下緋を侮ることは出来ない。術士の大部分が下緋であり、火の国全土に散らばるのも下緋なのだ。

「いいなあ、惣次は、術士になれて」
悠真は口癖のように惣次に言った。

「ここに配属前は、紅の石を憎んだもんじゃ。普通の生活をしてえ、術士の大半はそう思っておる。もしかしたら、紅様もそげえ思ってるかもしれんの」

口癖のように術士にあこがれる悠真に、惣次は諭し続けた。

「この村は平和じゃから、この村にずっとおるのがええ」

悠真は惣次の言葉の本意が分からなかった。惣次が首に紅の石をか

けていることを、しっかりと見ていた。紅の石は、赤く輝き、灯台の明かりをつける。それは、摩訶不思議な光景だった。

世界は色で満ちている。赤、青、黄、燈、黒、白、紫……それぞれの色にも濃度があり、透明度があり、二つとして同じ色は存在しない。八百万の色。悠真は赤い太陽が好きだ。青い海が好きだ。薄青の空が好きだ。木々の緑が好きだ。黄土色の砂浜が好きだ。白い雲が好きだ。黒い夜空が好きだ。

幼い頃から、悠真は色が自分を見ているように感じていた。それは、色が力を持っているからかもしれない。赤い色は力を持つ。この火の国で最も高貴で、最も強い色。誰もが赤を讃え、赤を身に付けることは許されない。人の命は赤で動き、赤は熱を持つ。下緋の惣次は紅の石を持っている。力を持つ赤を身に付けている。悠真は、術士に憧れた。色の力を引き出し、色の力を制御できるから。

始まりの赤（２）

その年の梅雨は雨が多かった。幾つもの嵐が訪れ、海は荒れ、何日も漁に出ることが出来なかった。嵐なのに風はさほど無く、尋常じゃないほどの雨が降り続いた。砂浜には、流木や千切れた海藻が打ち上げられた。雨になると祖父の体の調子が悪くなる。悠真の祖父は年のためか、痛む膝をさすり、梅雨時期だというのに囲炉裏に火を入れていた。歩くのすら間々ならなくなった祖父を見て、悠真は胸が痛み晴天を望んだ。

嵐は、何日間も村の上に留まり続け、下緋の惣次は、灯台に籠り船が難破することを恐れていた。悠真が惣次に握り飯を届けた時、惣次は灯台から海を見ながら悠真に言った。

「嫌な感じじゃ」

惣次の言葉に、悠真は首をかしげた。

「紅の石が反響しておる。野江に勝つほどの力か……」

惣次が海を見る目に迷いは無かった。

惣次の目は、悠真に不安を与えた。多すぎる雨が地に返ることなく山肌を流れ落ちてくる。大地が悲鳴を上げていた。

「非難しよう山が崩れるかもしれない。じっちゃんや村の人を呼んでくるから」

悠真が掃除に言うと、惣次は頷いた。

雨の中、悠真は走り、村の家の一軒一軒の扉を叩き、灯台への非難を勧めた。嵐の中では笠も蓑も役に立たない。風に耐えて、悠真は高い波が打ち寄せる海岸を走った。首を横に振るもの、悠真の言葉に耳を傾ける者、反応は様々だった。

「逃げれるもんから先に連れて行き」

祖父がそう言うから、悠真は逃げることに賛同した村の人を連れて灯台へ走った。子供を抱き、肩を貸し、何度も、何度も灯台と村を往復した。灯台の中は非難した人で溢れ、誰もが下緋である惣次を

頼っていた。非難をすることを決めた者の中で、残るは、悠真の祖父と数人の老人だけとなった。必然的に、老人が最後になるのは、散ることの美学を持つ火の国独自のことも知れない。田舎のこの村には、その精神が強く根付いている。

「もう一回行ってくる」

悠真は再び嵐の中、外へと出た。

灯台は海へせり出した高台にある。高台から石の階段を降りて砂浜を目指した。嵐の勢力が弱まることはない。夕方だというのに、外は夜のように暗く、雨は冷たく悠真の体力を奪い、海は大きな音を立てて唸る。地の底から響くような音。その音に、悠真は足を止めた。何か、大きなものが迫ってくる恐怖を覚えた。

直後だった。悠真は息を呑んだ。海岸に面した里山の大半が崩れ落ち、悠真の家を呑み、学び屋を呑み、船を呑み、村の大半を呑み込み、土砂が川のように流れ、微かな明かりに照らし出されるのは、茶色い世界。流れる土砂が大地を揺らし、全てを洗い流す。祖父が生きている可能性は皆無。土砂は思い出を刻んだ家を、両親が生きた証を、全てを洗い流す。迫る音。唸る地面。この世の光景でない。地獄絵図のような情景。

「そんな……」

悠真は言葉を失った。ごつごつした祖父の手の感触が未だに残っている。船の舵を操る逞しい腕も、禿げた頭も、酒を飲んで上機嫌に語る声も、父と母の位牌に手を合わせる後姿も、全てが鮮明に思い出される。その祖父の姿が瞬く間に茶色い土砂に呑み込まれた。二度と見ることが出来ないのだ。何かが悠真の中を通り過ぎた。茶色い色が、流れる緑の木々が、悠真の胸に迫った。

——果てしない孤独

悠真が感じたのは「孤独」だった。この広い世界でたった一人残されたような気がした。悲しみも絶望も感じない。何も考えられないのだ。世界の色が消えたような気がした。

「悠真」

悠真の名を呼んだのは惣次だった。惣次の手が悠真の肩に乗せられた。惣次の手の重みが、悠真の世界に赤い光を取り戻した。赤に導かれるように、少しずつ色が戻ってくる。

——色を憎んでは駄目よ

誰かが悠真に言ったような気がした。それは愛した村が消えた日の出来事だった。

「誰も生きておらん。紅の石が言うとする」

惣次はそう言うと、流れる土砂に手を合わせ、深く頭を下げた。

悠真たちは、灯台で身を寄せ合い朝を待った。その数、三十人ほど。村の人口の半分にも満たない。子供が泣き、眠りに落ちる。大人だけが不安を抱え、手を合わせる。無事に朝を迎えられるのかという不安。これからの生活に対する不安。下緋である惣次が持つ紅の石が淡く輝き、人々のやつれた顔を照らしていた。赤が人々に安らぎと勇気を与える。

「何も心配することない」

言ったのは惣次だった。

「今の紅は、とても聡明で優しい子。あの子に任しておけばいい」
惣次が言うから、悠真は未だ見ぬ紅のことを思い描いた。男なのか、女なのかも分からない。年も分からない。けれども、紅という存在だけは、火の国に生きるもの全てが知っている。もちろん、悠真も知っている。

「今の陽緋の野江は歴代最強の術士。美しく、術だけでなく剣技にも優れる。あの子だったら、多くの術士を束ねていける」

惣次は続けた。

「今の朱将の都南は、剣士としても、策士としても優れている。術は使えぬが、柴の鍛えた刀が補っている。多少荒っぽいところもあるが、不器用なだけ。他者に気遣いの出来る子だ」

惣次はそこまで言うと、村人たちを見渡し微笑んだ。

「紅を守る朱護頭の義藤は、若くて頑固だが頭の切れる子だ。術に優れ、剣技に優れる。子供の頃から紅を守るために戦い続けてきた。

生まれながらの才にも恵まれ、努力も惜しまない。数年後が楽しみな子だ」

惣次は紅を守る方々の名を知り、気安く呼んでいる。それは、今までの惣次の印象からは考えられないことだった。惣次は弱くて年をとった下緋で、それ以上でもそれ以下でもない。下緋は、術士の中でも最下の存在。紅に近づけるような立場でない。なのに、どうして惣次は知っているのか。そんな疑問を悠真は持ったが、それを問い詰めることは出来なかった。惣次の言葉が悠真を始めとし、村の人々に希望を与えているからだ。絶望的な状況でも、紅が守ってくれる。そういう希望が満ち始めた。火の国で生きる民にとって「赤」は希望の色なのだ。

「他にも学者の佐久やからくり師の鶴蔵、加工師の柴や、数え切れない子たちが紅を信頼し、支えている。何の心配も要らない」

惣次の言葉も田舎臭さが抜けている。噂でなく、惣次自身が紅を知り、紅の回りの優れた術士たちを知っている。悠真はそんな疑問を覚えたが、紅の話聞いて心が和んだ。紅は色神であり、悠真たちが崇拝できる存在だから、紅という存在が疲れ果て、希望を失った悠真たちに光を与えた。赤い色を与えた。身を寄せ合い、濡れた体を乾かし、うつらうつらと悠真は夜を過ごした。祖父が死んだという実感はまったく無い。朝日が昇る頃、再び嫌な予感を覚えた。嵐は弱まることを知らず、再び地鳴りが響く。突然、惣次が人々を掻き分け、年齢を感じさせないほどの勢いで駆け出した。直後、高い波が灯台に迫った。大量の海水が窓を押し破り灯台の中へ入り、惣次の紅の石が輝き、風を巻き起こし水を防ぐ。しかし、それは一時のこと。紅の石の輝きが弱まった直後に、鋭く剥がれた木の柱が惣次の胸に突き刺さった。惣次の赤い血が飛び散り、悠真の頬につき、地鳴りが響き、山も崩れ始めた。紅の石はまだ水を防いでいる。それが、長く持たないことは明らかだった。一刻の猶予も無かった。

悠真は惣次と同じように人々を掻き分けて駆け出した。強い風と雨が悠真を阻もうとしたが、悠真は止まらなかった。悠真が惣次に

駆け寄ったとき、彼は息も絶え絶えの状態で、空を見たままの目に輝きはない。助かる見込みはない。悠真は何も出来ない。術士である惣次が何も出来ないのだ。悠真に何かが出来るはずがない。しかし、悠真は何かをしたかった。悠真の後ろには、生きることを切望している村の人たちがいる。親も祖父も亡くした悠真にとって、村の人が家族だった。

惣次の紅の石がそこにあった。

「……悠真、お前なら出来る」

惣次は倒れ、目を見開き悠真を苛烈な目で見据えた。駆け寄った悠真に、惣次は血で汚れた手で紅の石を差し出した。燃えるような赤。赤は美しい色のはずなのに、血の赤は少しも美しく思えなかった。残酷で、恐ろしい色のような。それでも、悠真は赤にすぎた。今の悠真を救えるのは赤だけなのだ。

——力を……

悠真は思った。手に紅の石を握り、願った。

——紅の石は、守る力があるはずなんだ。力を……

悠真の脳裏に死んだ祖父の姿が見えた。祖父と酒を酌み交わす惣次の姿が見えた。

——力を……

直後、悠真の視界が赤く染められた。赤い色が鮮やかに輝いた。体の中を熱い何かが駆け抜けていく。赤、青、黒、白、黄、橙、緑……。数え切れないほどの色が悠真の身体を駆け抜け、赤だけが、鮮烈に強く輝いた。

そこには風も雨も冷たさも無い。悠真は赤い光の中にいた。振り返れば、身を寄せあう村の人たちがいた。悠真の手の中の紅の石が輝き、強い力を発していた。

「ありがとう」

悠真は言った。それは、本来術士としての才覚がない悠真に力を貸してくれた、紅の石への礼だった。そして、村の人を守るために命を懸けてくれた惣次への礼だった。

「ありがとう」

悠真の頬を涙が流れた。助かったという安堵が悠真を包み込み、気づけば、惣次の紅の石は、色を失い砕けていた。それは惣次が死んだからなのかもしれないが、詳細は術士でない悠真には分からない。悠真は、紅の石に相應しい存在でないのだから。

赤との出会い

数時間後、長く降り続いた雨は止み、雲の間から太陽の光が差し込んだ。それと同時に、悠真の意識は遠のいた。助かったという安堵と極度の疲労がもたらしたのだ。

海之音が心地よい。潮の香りが心を満たしていく。しかし、体は燃えるように熱い。熱で節々が痛み、体が重く感じた。世界は赤く、熱い。赤い。赤い。燃えるように赤い。

——悠真

遠くで母の声がした。記憶の中に残された母の声は、いつまでも若いままだ。赤い世界の中で、悠真はもがいた。体が石のように重く動かない。目を開いても赤い色しか見えない。

——色は力を持つ。

惣次の声がした。

——紅の石は赤い色の力を引き出す。強大な力を引き出す。破壊しか出来ないと思う輩が多い中、よく守ったもんじゃ。

そこで悠真はゆっくりと思い出した。嵐が村を襲い、祖父が死んだ。惣次が死んだ。村は消えた。悠真は紅の石を使った。重く熱い体は、それが原因なのかもしれない。

赤い色は高貴な色。赤を纏える者は限られている。赤い色。赤い色。

——のお、小猿。

女の声がした。高圧的で、強い声。気高く、赤く響く声。悠真は辺りを見渡した。辺りは赤い世界。高貴な赤い色の世界。

——わらわの色に染まれ。小猿。赤が小猿を守るぞ。赤こそ、最も気高く美しい色じゃ。

赤い世界。赤い声。悠真は声の主を探した。気づけば、声の主は悠真の目の前にいた。赤い髪、色白の肌に赤い唇が栄えている。襟元

を大きく開いた着物は赤い色。赤い瞳。高貴な赤は彼女の色なのだと、悠真は悟った。

「色神紅」

悠真は彼女が紅だと思った。火の国の色神。この火の国は赤い色を司る色神紅を有している。強大な力を持つ赤い色は火の国の色だ。悠真が彼女を紅と呼ぶと、彼女は、けらけらと笑った。

——誰が紅じゃ。わらわは赤。色神ぞよ。紅はわらわの色を使い、わらわの色の石を生み出すだけ。わらわが赤。小猿、わらわの色になれ。他の色になるな。赤がもつとも強く美しい色じゃ。

赤と名乗った色神は悠真の顎に指をかけた。細い指はとても強かった。

——赤が小猿を守る。今度こそ、赤が世界を取る。悠真は彼女が何を言っているのか分からなかった。

——お下がりなさい。赤。まだ、この子は色を選んでいないわ。一つ、声が響いた。悠真は声の主を探した。澄んだ、無色な声。

——五月蠅い色じゃ。赤を選ぶのは時間の問題じゃと言うのに。赤はすつと悠真から手を引いた。

——この国は赤の国ぞ。赤い色を守る国。この国で生きる以上、赤の力を必要とするはずじゃ。いつでも貸すぞ。赤を選ぶのならの。わらわの色を選べ。

赤は悠真に言った。そして、美しく身を翻した。

——一つだけ。小猿がわらわの色を使い、他の色も小猿の存在に気づいたはずじゃ。ぐずぐずしておつても、他の色に狙われるだけじゃ。よう覚えておけ。色は動き始めた。

赤の大きな帯が優雅に揺れた。結い上げられた赤い髪。細い首のうなじが美しい。悠真は赤に心を奪われかけていた。

——悠真。

無色な声が悠真を呼んだ。

——容易く選んではいけないわ。赤は力の色。平和と戦いを生み出す。色が悠真を狙ってくるわ。火の国の外から全ての色たちが。大

丈夫、悠真が選ぶまで、私が悠真を守るわ。

何色でもない無色な声。悠真の心に住んでいるのは、何色でもない。悠真は色を持たない。それが分かった。赤い世界が無色な声に掻き消されていった。無色透明の、少し冷たい世界。熱された世界が冷えていく。とても心地よく感じるのは、それが悠真の色だから。

——色神紅に会いなさい。復讐とは関係なく。今の紅は優れた人だから赤に唆されることは無いでしょう。無防備なまま他の色に狙われるのなら、赤に身を寄せるのも良いでしょう。既に、私の色は動き始めたのだから。

その声は悠真を守る声。世界は動き始めた。田舎で平穏に暮らしていた悠真の世界は動き始めた。それが分かった。

赤の術士

「術士でないのに、術を使ってよく無事だったものね」

高く穏やかな女性の声が聞こえ、冷たい手が熱い悠真の頬に当てられた。すると、熱い体が徐々に熱を下げていく。先ほどの夢が嘘のようだった。悠真は夢を思い出した。よくもまあ、あれほどの想像を膨らました夢を見たものだ、と悠真は己に感心した。感心しながらも、悠真は目を開くことを拒んでいた。目を開けば、辛い現実が待っているに違いない。

「面白い子ね。——目をお開きなさい」

その言葉に惹かれるように、熱い体も冷えていく。強い力に引き上げられるように、悠真は目を開いた。夢が消えた。目の前には現実が待っている。

赤い羽織が風になびく。目を開いた悠真が見たのは、限られた者しか身に付けることが許されない赤い羽織だった。少なくとも、田舎で見る事が出来る羽織でない。悠真は赤い色の布を初めて見たのだから。悠真を覗き込んでいるのは、赤い羽織を肩にかけた女性だった。その手は悠真の頬に当てられている。

「陽緋様。村人はどちらへ？」

悠真の知らない男が、赤い羽織の女性に声をかけた。陽緋とは、最も強い力を持った術士を指す。「緋色」を与えられた術士の中の頂点。下緋の惣次よりも遥かに上の存在。

「市街へ誘導なさい。紅様への報告と官府へ復旧の要請を」

陽緋の指示に、陽緋よりも年は上だろう男が深々と頭を下げた。悠真は陽緋が腰から下げた刀に目を留めた。鞘も柄も、全てが朱塗りの美しい刀。赤を許された存在、それが陽緋。悠真は重たい体を必死になつて起こした。そこは灯台の中だった。崩れた壁と、布のかけられた惣次の亡骸——。村の人たちは、外へと出たようだった。起こした体が重く痛んだ。

「もう大丈夫ね」

陽緋は微笑むと、赤い羽織を翻して立ち上がった。赤い色が、胸に迫った。

惣次は陽緋を知っているように話していた。歴代最強の術士。剣技にも優れた存在。それが、目の前の彼女だとは信じられなかった。陽緋は惣次の遺体の前にしゃがむと、手を合わせ、深く、深く頭を下げた。尊敬する者の遺体に手を合わせているようであった。惣次の遺体に手を合わせていた陽緋は立ち上がり、身を翻した。陽緋に声をかけることは恐れ多いことだ。許されることでもないかもしれない。それでも、悠真は尋ねたかった。惣次が違和感を覚えた嵐の理由を、そして術士の中で頂点に立つ陽緋が、こんな田舎まで足を運んだ理由を。

「待つて」

悠真は陽緋の赤い羽織をつかみ、陽緋は首をかしげた。

「どうして、術士がここに……」

それは悠真の率直な疑問だった。陽緋は術士の中で頂点に立つ。都の紅城で、術士の指揮をとり、紅を守るのが仕事のはずだ。そんな陽緋がどうしてこの村にいるのか。

「それは、あたくしが術士の筆頭、陽緋であることを指しているのかしら。陽緋がここにいます。それを疑問に思っているのなら、返答は簡単よ。正体不明の何者かが、他者の紅の石を使った。そう知らされて、術士の筆頭のあたくしが出向いたまで。それだけのことよ」田舎者の悠真とは違う言葉遣い。細い手足に、萌葱の着物。深緑の袴。足元は悠真が初めて見た輸入物の長靴だった。下ろされたままの長い黒髪も目に留まる。何より目を引くのが、赤い羽織。もし、許されない者が赤を身に付けたのなら、それは厳しい罰則の対象となる。目の前の女性は、間違いなく陽緋だ。

「俺は……」

悠真は言葉を探した。悠真は紅の石を使うことが出来ないはずだ。術士の才覚には見放されていた。どうして、自分が紅の石を使えた

のかからない。

「全ては紅が判断されることよ。あなたは下緋である惣次を超える力を使い、人々を守った。術士としての才覚に見放されたはずの、あなたがね」

そこまで言つと、術士の一人が陽緋に駆け寄った。

「佐久様より連絡が。分かり次第、状況を伝えて欲しいとのことですよ」

陽緋は静かな口調で言った。

「紅様と朱将と佐久に伝えなさい。間違いなく、青の石の力でしようね。誰かが青の石を使い、雨を降らせ続けた。あたくしたちの進入を阻み続けた者が犯人でしょう。朱が動く必要があるかもしれないわ。そして、惣次の死についても、紅様へ報告を」
術士が深々と頭を下げた。

——犯人。

悠真はその言葉を聞き逃さなかった。

「待てよ」

相手が陽緋であろうと無かろうと関係ない。悠真は聞き捨てなら無い言葉を陽緋の口から聞いたのだ。陽緋は怪訝そうに振り返り悠真を見た。

「犯人ってどういうことだよ。青の石って何だよ」

陽緋に苛立つのは間違っていることぐらい、悠真にも分かる。それでも、込み上げる感情を抑えきれない。消化不良の気持ちが込み上げてくる。

「嵐じゃないのかよ。雨嵐じゃないのかよ。犯人ってなんだよ」

それは自然の嵐のはずだった。雨の多い梅雨で、雨嵐がきたまで。多すぎる雨で、海岸沿いの崖が崩れたまで。「犯人」、「青の石」。それは、嵐が人災であるという発言。人災である以上、祖父も惣次も殺されたのだ。なぜ、二人は死ななくてはならなかったのか。なぜ、村は土砂に押し崩されなくてはならないのか。平和な漁村にどんな罪があるのだ。なぜ、村の人たちは死ななくてはならなかった

のか。一体、この村が何をしたというのだ。

「どういうことだよ！」

愚かな行為だと分かっているが、悠真は抑えることが出来ず陽緋に飛び掛っていた。

天と地が入れ替わった。非力な悠真には、何が起こったのかさえ分らない。振り上げたはずの悠真の手は、陽緋につかまれ、悠真は水溜りの中に倒れていた。陽緋は左手で悠真の手をつかみ、右手は朱塗りの刀に伸びていた。陽緋は、紅の石を使わずとも、容易く悠真の命を奪えるのだ。悔しくて涙が溢れた。祖父も惣次も死に、村は滅びた。悠真が愛した全てが無くなり、父と母の思い出も消えた。悠真は一人になった。悔しくて、哀しくて、悠真の目に涙が溢れた。そんな悠真を見たからか、陽緋が刀の柄にかけた手を離し、服が汚れることを厭わず、悠真の隣に腰を下ろした。

「泣きなさい。そして、前に進みなさい。紅の石のことも、今回のことも忘れて。あなたは、十歳の選別で才覚を見出されなかった。術士になる必要も無いわ」

陽緋の言葉は温かい。悠真の中の陽緋の姿は涙で歪んで見えた。悠真は元来、意志の強い性格。簡単に引き下がることも出来ない。

「知りたいんだ」

悠真は言った。目から溢れる涙は止まらない。

「どうして、こんな事になったのか。俺は、引きさがれない」
陽緋は困ったような表情をした。

「あなたは、紅の石を使っただ。それも、他人の紅の石を。術士が持つ紅の石は、持ち主にしか使用することができないように加工されているはずなのに。他者の石を使用できるのは、紅だけのはずなのに。もし、望むのなら紅城へ連れて行くことが出来るわ。あなたが惣次の紅の石を使ったという理由を付けて。けれども、よくよくお考えなさい。紅城へ足を運ぶということは、術士になるということ。今までのような生活は送れないわ。考えなさい。犯人を捜すのは、あたくしたちの仕事。あたくしたちは、必ず犯人を捜し出し罪

を償わせる。それでは、あなたの気は晴れないのかしら？」

陽緋は悠真を連れて行くことを避けたいようだった。惣次も言っていた。術士になっても、楽しいことは無いと。逃げることは容易い。現実を忘れ、新しい生活を始めることは容易い。そう思うと、目の前に変わり果てた惣次の死体が浮かんだ。なぜ、惣次は死ななくてはならなかったのか。なぜ、祖父は死ななくてはならなかったのか。今、新しい生活へ逃げたところで何も変わらない。生涯、二人の死に追いかけられるのだ。

「紅城へ……紅城へ連れて行ってくれ。俺は、犯人を見つけれ。だれが村を滅ぼしたのか、正体を突き止め、自分の手で復讐するまで、俺は生きることが出来ない」

——色神紅に会いなさい。復讐とは関係なく。

無色な声に唆されたのではなく、悠真は己の意志で陽緋に懇願した。陽緋は一つ息を吐いた。

「紅城へ連れて行くわ」

悠真の人生は大きく動き始めた。赤い色が悠真を包んだ。まるで、悠真を染めようとするように。

赤の術士（２）

陽緋は十人の術士を連れていた。そのうち九人が村人の誘導と救援、そして現場の確認に残り、一人が陽緋に従った。悠真は陽緋に連れられ、田舎では決してお目にかかれない、からくりを見た。術士が使うからくりは、普通の物と異なり、紅の石の力を動力にして動くのだ。陽緋は最も優れた術士。だから、陽緋が使用するからくりはとても強大なものだ。陽緋に連れられた悠真が見たのは、木造の船だった。大きさは中船ほどだが、船の側壁に翼のようなでっぱりがある。その船は土砂が崩れた山の上にあつた。陽緋が持つていること、そして山の上に船があることから、それが希少なからくりであることが分かった。

「この、空挺丸で紅城まで行くわ。お乗りなさい」

陽緋は身軽な動作で船に乗り、悠真は空挺丸から落とされた縄にしがみつinaながら必死によじ登った。

陸に打ち上げられた船には、中央に小さな木箱が置かれていた。

悠真は甲板の隅に腰掛けた。陽緋は首にかけた紅の石を木箱の中に入れて蓋を閉じた。

「つかまっていなさい」

陽緋が言い、悠真は船にかけられた麻縄をつかんだ。直後、陽緋の紅の石は赤の光を放ち始めた。赤い色に呼応するように、共鳴するように船が振動を起こし始め、次第に赤の光は強まり、ゆっくりと、確実に宙に浮き始めた。

「浮いている……」

悠真は絶句した。紅城にはからくりを作る職人がいるという。紅の石の力を引き出し、紅の石の強大な力を制御する。有効に使う。陽緋の紅の石の強大な力を、からくりが制御し、宙に浮いているのだ。「すぐに着くわ」

田舎者の悠真が空飛ぶからくりに驚くのを見て喜ぶように微笑んで、

陽緋は言った。

火の国で空を飛ぶことは不可能だとされていた。それを可能にしたのが、強い力を持った陽緋と稀代のからくり師だ。悠真のような田舎者でも知っている。現在の陽緋が歴代最強と呼ばれる力を持っていることを。惣次も言っていたから間違いない。歴代最強という呼び方は、彼女の存在を蔽つたものに変わる。現に悠真も、現在の陽緋は、蔽つく渋い中年の男だと思っていた。しかし、目の前にいるのは、長い髪美しい女性。色白で細い手足は、華奢な印象を与える。悠真が瞬く間に地に伏されたことから、彼女が優れた武術の使い手であることは明らかだが、見た目からは想像できない。現に、風を切って進むからくり空挺丸を操作する彼女が、赤い羽織を脱いで、朱塗りの刀を置けば普通の女性。火の国では紅の石を使えるだけで、運命は変わる。紅の石が使えれば、必然的に将来は術士と決められる。悠真が憧れた特別な存在「術士」だ。

昨日までの雨が嘘のように空は晴れ渡り、眼下に広がるのは緑の山々と小さな村。そして田植えの始まった田。野菜を植えている畑。小川には水車が回り粉を引く。牛や馬に荷物を乗せた行商人が小道を歩く。漁村で育った悠真が知らない世界だ。

「あなた、名前は？」

陽緋が悠真に尋ねた。

「悠真」

答えると、陽緋はふわりと微笑んだ。

「悠真ね……。あたくしは野江よ。そもそも、あたくしの名を呼ぶ人など少ないのだけれど」

言われて悠真は思った。陽緋とは、称号である。彼女の名でない。それと同時に、惣次の言葉を思い出した。

——野江に勝つほどの力か……

惣次は知っていたのだ。陽緋の名が「野江」であることを、そして陽緋がここに足を運んでいることを。下緋は術士の中で最下の存在。その惣次が、陽緋の名を知り、陽緋が足を運んでいることに気づい

ていた。悠真は惣次という存在が分からなくなり始めていた。

「ねえ、野江」

悠真は惣次について尋ねようと野江の名を口にすると、陽緋野江に従う術士が刀の柄をつかんだ。その術士の刀は黒色だ。野江のような美しい朱塗りの刀ではない。

「陽緋様の名を気安く口にするな」

苛立つ術士を陽緋が制した。

「気にしないで。悠真は術士でないのだから。けれども、お気をつけなさい。紅城に住まう者の中には、頭の固い輩も多いから」

野江は風を含む髪を押さえながら言った。野江は気安いけれど、高貴な人だ。風になびく黒い髪も、権威を象徴する赤い羽織も、全てが野江を美しく見せている。

「どうして、俺を連れて行ってくれるんだ？」

悠真は野江に尋ねた。野江は悠真に対して、とても親切にしてくれる。

「あの村の下緋に、惣次といたでしょう。彼はあの村を、そして悠真にとても感謝していたからよ。でも、覚えていなさい。復讐に走ると身を滅ぼすわ。紅城に着いたら、大人しくしていなさい。それが、悠真の身を守るころになるから」

陽緋のその言葉が、悠真の胸に残った。野江の口から惣次の名が出る。確かに惣次は術士として野江の知る人であるのだ。悠真の故郷を愛してくれた惣次は、陽緋の知る存在なのだ。それがとても誇らしく思えた。

空挺丸は、風を切りながら空を飛んだ。

数時間飛び続け、開けた場所へと出てきた。そこは、家々が立ち並び大きな道は馬や人が往来していた。悠真は自分が田舎者と呼ばれる理由が分かったような気がした。想像していたよりも、市街はずっと都会だった。大きな建物も整備された道も、行き交う人々の活気も、悠真の故郷と異なる。ここが同じ火の国なのかと、悠真は思わず息を呑んだ。

「あれが紅城よ」

陽緋が指差した先には、赤い瓦と朱塗りの柱が美しい城が見えた。名の通り「紅城」である。火の国を守る赤い色を司る色神紅。紅が住まう城だから、赤い色が許されている。しかしそれは、悠真が想像していたよりもずっと荘厳で、悠真が想像していたよりもずっと赤が輝いていた。

野江が操る空挺丸は、紅城の庭の一角に降り立った。紅城は高い朱塗りの堀に囲まれ、降り立った庭には白い砂利が敷き詰められていた。目の前に迫る城は大きく、幾重にも重なる屋根が印象的だった。空挺丸が舞い降りると、人が走りよってきた。

「陽緋様、御任務お疲れ様でした」

走りよってきた数人の人は、地に膝をついて深々と頭を下げた。野江よりもずっと年齢の上の者たちが、深々と野江に頭を下げるのだ。当然ながら野江は陽緋。悠真たちが否応なく尊敬する術士の頂点に立つ存在。気安く話しかけることができる存在ではない。

「こちらの変わり方は？」

野江が尋ねると、先頭に膝を折った者が答えた。

「大事ありません。紅様がお呼びです。一刻も早く来るように、とのことです」

野江は空挺丸から飛び降りた。赤い羽織がひらりと風に舞う。音もなく美しく着地した野江は、空挺丸に残る悠真を見上げて微笑み、すぐに視線を膝を折る者に戻した。

「分かったわ。すぐに参りましょう。——空挺丸の整備と、悠真のことをお願いするわ」

すると、先頭に膝を折った者が言った。

「それが……紅様よりのご伝言では、陽緋様が拾ってきた小猿も一緒に連れて来るように、とのことですよ」

野江は苦笑した。

「何でもお見通しなのだから。悠真、一緒にいらっしやい」

悠真は野江に言われるがまま、空挺丸から飛び降りた。紅城の地に

足をつけると、体に赤が染みこんでいくように思えた。確かにここは、赤の色神のいる場所だ。何よりも赤が輝いている。悠真はそう思った。

赤の城

紅城は天守閣を持つ大きな城。朱塗りの柱に白い壁が美しい。板張りの長い廊下は塵一つ落ちておらず磨き上げられている。障子の隙間から見える部屋は、一面畳が敷き詰められ、部屋の中で書物を広げて仕事をする人の姿も見えた。悠真は、高価な畳を見たのは初めてだった。幾重もの階段を上り、廊下を進む。そこは張り巡らされた策のように複雑で、紅を守っているようだった。悠真は粗末で泥だらけの着物を着ていることが恥ずかしく、穢れた自分が歩くことで城を汚しているような気がした。すれ違う人々は、野江に深々と頭を下げていくが、悠真は自分が笑われているような気がした。「悠真は自分で紅城へ足を運ぶことを決めたのでしょうか。前を向きなさい。あなたは、思ったまま走り出す。そのほうが自然であなたらしいわ」

野江の言葉は的を射ていた。

上へと昇り、窓の外に広がるのは壮大な景色。長い廊下の先に一つの木枠の扉があり、扉の前には若い男が座っている。片膝を立て、野江と同じ、柄も鞘も赤い朱塗りの刀を立てて持っていた。年齢は野江より下。悠真よりは上だろう。藤色の着物に、やはり赤い羽織が印象的だった。赤い羽織を着ていることから、扉の前の若い男も紅に近い存在だろう。そして、高い地位を持っている。若い男の目が、じつと悠真を見ていた。

「調子はどうかしら？義藤」

野江は若い男を義藤と呼んだ。野江が気安く呼ぶから、悠真は彼が野江とも近いのだと感じた。そして、惣次の話からも義藤の名が出てきたことを思い出した。惣次は、今、悠真の目の前にいる男のことも知っていた。ますます、惣次のことが分からなくなった。同時に、悠真は目の前の男が恐ろしく感じた。まるで、抜き身の刃。鋭く、近づくものを傷つける。悠真は喉元に刀を突きつけられたよ

うな錯覚を覚えた。

「それは俺に対してのことですか？それとも紅に対してのことですか？」

悠真は義藤の言葉に戸惑った。彼は、紅を呼び捨てて呼んだ。ここは、陽緋の野江の本名を呼ぶだけで睨まれる場所。そんな中で紅を呼び捨てにすることは、ありえないこと。悠真の目の前にいる男は、色神紅と近しく、色神紅を呼び捨てにできる存在なのだ。

「大仕事を終えて戻ったあたくしに、労いの言葉の一つも無いのかしら？」

野江は立ち止まることなく前に進んだ。

「俺は、その小猿を信用できないので」

義藤は鞘に入れたままの朱塗りの刀を差し出し野江の行き先を阻み、野江はその行為に不機嫌さをあらわにした。悠真は自分が信頼されていないことは、紅城へ足を運んでからずっと感じていた。誰もが見せる敵意と不信感。ただ、野江と一緒にいるから野次を言われることも無く、取り押さえられることも無いというだけだ。術士の筆頭陽緋である野江は、それだけの権威を持っている。そんな野江に逆らうのは、命知らずの愚か者のすること、もしくは野江と同等の立場にある者のすることだ。抜き身の刃のような義藤はおそらく後者だ。隠し切れない品の良さを義藤は持っている。田舎者の悠真とは異なる品の良さが彼にはあるのだ。

「この子をここへ招いたのは紅よ。軽率な真似はお止めなさい。それに、あたくしの目を疑うつもりなのかしら？」

野江の声色はいつも同じだが、言葉の端々に苛立ちを隠していた。「どんな理由で、小猿を招いたのか分からない。俺は朱護だ。紅を守る」

義藤は、まっすぐな人のようにだった。陽緋の言葉にも意見を変えようとしない。そんな義藤がおかしいのか、野江が苦笑した。

「悠真は惣次の石を使ったわ。不思議よね。他者の紅の石を使えるのは、紅だけのはずなのだから」

義藤は一度悠真を睨み、再び野江に目を戻した。

「ならば、なおのこと紅には近づけられない」

もちろん、悠真も敵意を向けられることに苛立った。義藤は悠真を害のある敵だと認識しているのだ。敵だと認識される覚えは悠真にない。なぜなら、悠真は家族を失い、故郷を失った。被害者であり、復讐者なのだ。感情は混乱し、苛立ちは隠せない。紅城という権威ある場所に足を運び、赤い羽織を許された立場のある人々に直面しても、怯むことは許されない。

「ちよつと待てよ」

悠真は足を踏み出した。このまま斬り殺されるかもしれない。それでも悠真は構わなかった。あの嵐の日に、失いかけた命だ。未来は土砂に流され、未来は祖父や惣次と共に死んだ。この場に己の血を流し、紅の顔に泥を塗りたかった。一步足を踏み出した悠真と同じように、義藤も軽く腰を浮かせた。

「おやめなさい、悠真」

野江が悠真の前に手を出し、行く手を阻んだ。

「あなたもよ。刀を引きなさい、義藤」

野江に従うのではなく、彼自身の意志で義藤は刀を下げた。義藤は、本当に悠真の命を奪おうと思えば、野江の制止に従うはずがない。悠真に強い敵意と殺意を向けつつ刀を下げる。何を考えているのか分からない人だと悠真は思った。悠真には、義藤の行為が、紅が悠真を試している一貫のように思えるのだ。そんな悠真の気持ちを知ってか知らずか、野江は小さく微笑み、廊下に膝をついた。

「座りなさい、悠真。紅の前よ」

野江に言われて、悠真は慌ててその場に正座をした。汚れた服の土が、廊下に汚れを落としていく。野江と義藤が深く頭を下げるから、悠真もそれに習って頭を下げ、ゆっくりと流れるような所作で義藤が襖を開いた。

赤の色神紅（１）

むせ返るほどの香の匂いが、襖を開くと同時に辺りに漂った。悠真の心臓は嵐の海のように激しく脈打っているのに、頭は晴天の空のように冴え渡っていた。紅は色神。この火の国の頂点に立つ。紅に面通しを行うことは、普通の人生ではありえない。誰もが感極まるはずだ。なのに、悠真は紅に対して尊敬の念は抱いていない。故郷を、家族を奪った存在をどうして尊敬することができようか。悠真はそれほど大人でない。頭を下げたまま視線だけを上に上げてみると、朱塗りの部屋が見えた。それ以上はどんなに視線をあげても何も見えない。それが、自分と紅との間にある長く、果てしない距離のように思えた。

「野江、よく戻った。どうだった、惣次が最期の人生を生きた村は？」

穏やかな男の声が響いた。その声はどこか悠真に惣次を思い出させた。

「壊滅していました」

野江が答えた。悠真は声の主が紅なのと思った。紅は色神だ。通常は紅が男なのか女なのか、若いのか老人なのか知らない。ただ、その穏やかな声の主は色神の印象とは異なっていた。この部屋に満ちる鮮烈な赤い色と穏やかな男の声は印象が異なるのだ。不思議な気分だった。何より不思議に感じたのは、その声がとても惣次に似ていたからかもしれない。穏やかさが、大きさが、包み込むような広がり、祖父と酒を酌み交わしているときの惣次と同じだったのだ。むせ返るような香の匂いも、男とは不釣り合いだ。

「そうか……惣次は死んだんだな。最期まで紅の石を使い続けるとは、惣次らしい」

僅かに男は苦笑していた。紅であろう男は言った。その声がとても哀しげで、色神が下緋の惣次を案ずることが意外だった。

「はい。そして、惣爺の石をこの子が……」

野江が悠真を指した。悠真は頭を下げたまま、二人の会話を聞いていた。耳だけで部屋の中の様子を感じ、部屋に満ちる鮮烈な赤を全身で感じようとしていた。その二人の会話に割り込むように、気高く高貴な声が響いた。

「遠爺、わらわにもしやべらせよ。義藤、野江、顔を上げよ。よう戻ったな、野江」

それは、女性の声のようで、少年のような、不思議な声だった。確かなのは、その声が発せられると部屋に満ちる鮮烈な赤が一層強まるということだ。赤い声が花開き、赤い声が部屋の空気をすべて変えていく。

「気遣い痛み入ります」

野江が答えた。悠真は紅に顔を上げることが許されていない。何も見ることが出来ないから、悠真は耳で必死に辺りを探った。この部屋には惣次と似た声の男と、高圧的な女性がいる。どちらが紅なのか、悠真は想像がついていた。このむせ返るような香の匂いも、目を逸らしたくなるような存在感も、赤に相応しいのは彼女だ。悠真は赤を感じていた。襖が開いたときから感じた色。包み込むような大きく鮮烈な赤が目の前にあった。

「わらわに分からぬことなど、何もあらぬ」

悠真は彼女が紅であると思った。高貴な香の匂いがそれを示していた。香の匂いも、気高い言葉も、全てが彼女は紅であると示していた。

「あら、そうだったわね」

野江は苦笑していた。

「どうであつた？」

一言、彼女は言い、野江は答えた。

「漁村は壊滅です。生存者は三十余名。降り続く雨に山が崩れましました。山が崩れるまで、あたくしたちは中に入ることが出来ませんでした。外部からの進入を阻みつ、内部で雨を降らせていました。」

隠れた術士がいるのでしょうか。それも、強大な力を持った。先代前の紅の石を隠れ持つ者は限られています。おそらく官府の仕業かと――一言、付け加えるのなら、村を破壊して相手を殺してでも止めろと言われればできなくともありませんでした……」

まるで自らの実力を伝えるような野江の発言に、苦笑する紅の声が聞こえた。

「分かっておる。野江はわらわの自慢の、歴代最強の陽緋じゃ。野江の力は信じておる。しかし、相手も相手じゃ。わらわを引きずり出すために、そこまでするとは。愚かな奴らよ。したところで、わらわは要求を呑まぬのに」

その言葉で、悠真の中の何かが結びついた。祖父が死に、惣次が死に、村が滅びた理由が結びついた。全ては、紅に関すること。紅が何かの要求を拒否したから、村は滅び、悠真は大切な者を失った。悠真の中の何かが沸々と沸き起こった。憎しみ、絶望、全てを巻き起こし大きな波を作り出していく。村を滅ぼしたのは、紅だ。間違った矛先を向けていることは理解している。けれども、自分を抑えることが出来なかった。

「あんたが……」

村が滅んだのは、紅のせいだ。悠真は顔を上げた。叱責され、処罰されるのは覚悟の上。今の悠真は、それを考える余裕がない。目の前に広がるのは、朱塗りの壁が鮮やかな小部屋。畳みの緑色が朱塗りの壁の鮮やかさを際立たせ、小窓から光が差し込み、部屋の中を照らす。一段高くなった奥にかけられた簾は半分開けられ、ひじ置きにもたれかかるように、しどけなく横たわっているのは、紅色の着物が鮮やかな女性。黒髪は結い上げられ、紅い簪が美しい。赤が高貴とされる火の国では、唇に紅をさす人はいない。鮮やかな口紅と、紅く線が引かれた目元がとても魅力的だった。妖艶で、儂い。悠真は彼女以上に化粧が似合う人进行い浮かべることが出来なかった。間違はなく、それは紅。誰よりも鮮烈な赤を持っている。紅は夢に現れた赤とどかがと似ていた。高圧的な雰囲気と同じだ。紅の

横に控えるように、惣次と似ている男が座っている。惣次と似ているが、惣次とは異なる。赤く美しい羽織が二人の違いを示していた。惣次は死んだ。同一人物のはずがない。それに、下緋の惣次と赤い羽織を結びつけることが出来なかった。

——赤は美しい色じやろ。

夢に現れた赤の声が悠真の脳裏に響いた。憎いはずなのに、悠真の目は彼女を見つめ、心は彼女を捉えていた。とても美しい人。赤が鮮烈に悠真の心に刺さる。赤が視界に煌く。

紅は赤い煙管を口にくわえていた。煙管を持つ指先の爪は紅く塗られ、身を預けるひじ置きの際には火鉢と香立てが置かれていた。

「あんたが滅ぼしたんだ！」

愚かな行為だ。悠真は、感情に任せて紅に飛び掛った。野江の隣を駆け抜け、義藤の隣を通り抜けようとした。悠真は野山を駆けて育たなかった。筋肉が躍動し、心臓が高鳴る。強い緊張の中、復讐心だけが、悠真を突き動かしていた。何もしなければ、悠真は物と同じだ。再び生きるため、夢を見るため、現実を走るため、悠真は目の前の紅を憎んだ。紅を守る義藤が体を起こす。世界がゆっくりと動き、悠真の耳に自分の呼吸の音が響く。

「うわあああ！」

悠真は己を奮い立たせるために大声を上げ、何かに取り付かれたように、悠真は義藤の隣を駆け抜けようとした。しかし、相手は紅を守る存在。火の国でも卓越した力を持っている。

「愚かな」

一言、耳元で響いた。荒立つ悠真の感情とは逆に、義藤の声は静かで、水の上に生じた小さな波紋のようであった。

白刃を首に突きつけられ、悠真は身動き一つとることが出来なかった。義藤は悠真を容易く制し、格の違いを否応なしに感じさせられた。抜刀した義藤が悠真と紅の間に割って入り、悠真に白刃を突きつけるのに要した時間は一瞬のこと。野江に地に倒された時と同

じように、悠真は何が起こったのか分からないのだ。

「わらわが何を滅ぼしたと？」

紅がゆつくりと体を起こした。紅が動いたたびに、鮮やかな赤い色が動く。そして、悠真の喉に白刃を突きつける義藤に言った。紅の声は赤く輝く。

「義藤、案ずるでない」

そして紅は悠真に言った。

「そちは、生き残りとな」

紅の持つ煙管から、白煙が上がっていた。紅の動きの一つ一つが優美で、悠真の心を惹き付けた。歩く姿が気高い。流すような横目が美しい。あまりに高貴で、あまりに気高い。それが紅なのだとしっていた。彼女以上に、赤が似合う存在はこの世界にいない。憎い。紅が憎い。赤が憎い。なのに、美しさから目を離すことが出来ない。「わらわに何の罪があると申すのか？」

紅は優雅に微笑み言った。赤い口元がほろりと綻ぶ。

「野江。小猿を連れてくると決めたのは野江じゃ。何が野江を動かした？」

紅の持つ煙管が野江を指した。紅の白く細い手が持つ煙管がゆらゆらと白い煙を上げていた。朱塗りの下地に金の装飾が施された、美しい煙管だ。

「まあ良い、ここへ小猿を招いたのはわらわじゃ。小猿の村が滅びたのは、わらわに要求を吞ませようとした者に違いない。そこに惣次がいると知っておったのじゃろう。わらわたちが惣次まで見捨てるとは、相手も思っておらんじゃったじゃろうな」

悠真は紅の口から下緋である惣次の名が出てきたことに疑問を持ったが、何も問うことが出来なかった。何も問えない自分。無力な自分。目の前には、紅がいる。果てしない怒りが込み上げてきた。紅は知っていたのだ。要求を吞まないことが、村の滅亡につながることを。紅だけでない。野江も、義藤も知っていたのだ。知っていて、見捨てた。紅は高貴な存在だ。色神であり、火の国を支える唯一無

二の存在。だからと言って、悠真にとっては見知らぬ人だ。村の方が大切だ。村を見捨てた彼らが許せなかった。

「だから、あんたが殺したんだ！」

悠真の感情が爆発し、色が悠真を包んだ。一つ、赤い色に悠真は心の中で手を伸ばした。

——わらわの色を貸そうぞ。

赤が悠真に言った。悠真は赤の声に心の中で頷いた。

赤の色神紅（２）

祖父は悠真が幼い頃から口癖のように「心を平静に」と言っていた。悠真はそれが出来ず、小さな頃は、年上の子供に食って掛かった。喧嘩をして、負けたことは無かった。負けず嫌いなのは、悠真の性分だ。誰かに自分という存在を否定されたり、踏みにじられたくない。

（そうやっておったら、大事なもんを見落としてしまう。色は力を持つ。その色を支配するものは、どれだけの力を持つんかのう……誰もが、己の一色をもっており。同じ赤を持つ人であっても、色が異なると。負けず嫌いで喧嘩っ早い悠真の色は、どんな色かのう？）悠真が一度、悠真に言った。感情に任せて、殴り合いの喧嘩をした後のことだった。

（色は力を持つんじゃ。その中で赤は強い力を生み出す。赤は強い色じゃ。強い分、己を守り、相手を傷つける。赤い色がなければ、生き物は生きられん。命は赤で支えられておる。悠真の体にも赤は流れ、植物は緑で満たされ、空は青で輝く。色の中でも赤は強く、美しく、残酷な色じゃ。だから人は赤を敬い、赤の力を知らねばならん。この紅の石は、色神紅が一日ひとつだけ生み出す石。原石がさらに力を発揮し、むしろ術士が使えるように加工師が加工する。強い術士ほど強い石を持つ。だから術士は忘れてはならぬ。その力は、命を奪うほどの力であることを。悠真が術士であつたとして、悠真は命を守る術士になるのか？命を奪う術士になるのか？）

惣次は紅の石を撫でながら赤い色の力を悠真に教えてくれた。赤い色は強い力を持ち、命には赤が流れている。そもそも悠真は、術士の才覚に恵まれず選別から落ちた。どれほど術士に憧れを抱いても、術士になる夢はかなわない。だから、悠真は惣次の話をあまり聞いていなかった。

目の前に赤い色が迫った。赤は力だ。相手を傷つけ、憎むものを

遠ざける。だから悠真は赤を求め、復讐の力となる赤を求めた。探すまでもなく、目の前には、義藤の紅の石があった。その紅の石が鮮やかに輝き、色が迫り、強い光と熱が辺りを包んだ。悠真は義藤の赤になる。

——おやめなさい、悠真。

無色な声が悠真を制した。しかし、悠真は止まらない。己を止めることが出来ない。己の体に赤が広がっていくことを感じながら、悠真は赤に身を浸した。

——赤

——赤

——赤

高貴な赤い色が目の前に迫った。

「お止めなさい！」

野江の声が響いたが、悠真は抑えることが出来なかった。溢れ出る力を制御できない。義藤が首から下げていた紅の石は強大な力を発し、紐は切れ、義藤が吹き飛ばされて壁に叩きつけられた。

「お止めなさい！」

振り返れば、野江が紅の石を使い、悠真を押さえ込もうとしていた。畳みが剥がれ宙に浮く。野江の言葉で冷静に戻った悠真は止めようしたが、止めることが出来ない。溢れ出る力がそこにあるのだ。野江の紅の石の力と、悠真のせいで暴走した義藤の紅の石の力がぶつかり合い、渦を巻いていた。

「悠真！」

野江の声が響いたが、悠真の世界は赤で埋め尽くされていた。義藤の紅の石が悠真に力を与えているのだ。赤い世界。渦を巻く力。

「他人の石を使えるとは。やはり、連れてこさせて良かった。遠爺も同じ意見だろ」

その声は間違いなく紅の声。悠真の赤の世界に、紅色の着物を着た紅が入ってくる。歩き方はしどけなく、それでも美しい。強大な力が渦巻く中、どうして紅が普通でいられるのか分からない。紅の周

困だけ、赤い色が弱まり、彼女は足を進め、紅の着物を引きずりながら、ゆつくりと簪を引き抜いた。長い黒髪がはらりと落ちる。力が渦巻く中でも、紅だけは別世界に存在しているのだ。紅が紅の石の力を収束させていく。

「私は、紅だ。私以上の紅の石の使い手なんているはずが無いだろ。術士は色の力を引き出すことしか出来ない。けれども私は色神紅。紅の石を収束させることができ、いかなる紅の石も使用することが出来る。加工された石であってもそれは然り。赤は、私の色だ。――赤、なぜ小猿に力を貸す」

紅が簪を地に捨て、悠真の手をとった。色白の細い手は、少し冷たかった。

「俺は、俺は……」

悠真に満たされていた赤が少しずつ収束されていった。どんな赤い色であっても、色神紅の前では逆らえないようであった。憎しみの赤を、紅が慈しみの赤へと変えていく。紅の持つ赤い色は誰が持つ赤よりも美しい。

「村を壊滅に追い込んだ者は、必ず捕らえてみせる。お前が手を汚す必要もない」

紅は断言し、微笑んだ。赤い色が綻び落ち、悠真の心を和ませた時、悠真の体の力は抜けた。思い起こせば、悠真は赤い色の牢獄にいたような気分だった。全ての感情が憎しみの赤に染められていき、そこから紅が救い出してくれたのだ。安堵と疲労と虚脱感で悠真は立ち尽くしていた。

赤の色神紅（3）

紅の部屋は元の形を保っておらず、部屋の端で義藤が倒れていた。野江が慌てて義藤に駆け寄り、体を起こしていた。紅の石の暴走の最も近くにいた義藤が無事だとは思えなかった。

「遠爺、大丈夫か？」

紅は振り返り、控えていた惣次似の男に言った。男は先ほどの騒ぎが嘘のように、整然と座り、赤い羽織にかかった埃を払っていた。

「問題ない。まだまだ現役だ。それで紅、お前はと思う？惣次の石を使った子供は、義藤の石まで使った。これは加工が悪いという言い訳は出来ないぞ。義藤の石は、柴が加工したんだろ。柴が加工を誤るはずが無い。紅、お前だけのはずだ。他人の紅の石を使えるのも、他人が使った紅の石を収束させることが出来るのも……。それは色神の特別な力のはずだ」

紅は頷き、苦笑しながら悠真に言った。

「紅の石は、持ち主に合わせて作られている。誰の物でもない石ならば未だしも、義藤のために加工された石を使うとは、どういう体の仕組みをしているんだ？実力者義藤のために、我が国最高の加工師の柴が加工した石だ。小猿、お前は私と体等の力を持つつもりか？」

第一印象のような、他者を見下す高圧的な仕草は無く、そこにいたのは普通の人。親しみやすく、人の中心にいるような存在。それが今の紅。悠真の不信感を察知したかのように紅は言った。

「ああ、あれは理想の紅像、その一だな。他にもその二、その三と続くから、いつか見る機会があるかもしれないな。——それで、野江、義藤は？」

紅は振り返り、野江に言った。

「問題ありません。今は気を失っていますが……」

紅は一つ息を吐いた。義藤の無事を知り、心底安心したらしい。

「義藤には、いつも悪いことをしているな、私は。本当に良かった」
紅が安堵したように微笑み、野江が苦笑していた。

「それなら、義藤に迷惑や心配をかけるのをお止めなさいな」

すると、紅は困ったように俯き、話題を変えようとしているように悠真に言った。

「それで、義藤の石を返してもらおうか」

悠真は逆らいがたいものを感じて、義藤の紅の石を紅に手渡した。

騒ぎの音を聞きつけてか、人が走ってくる音が聞こえ、紅は廊下の先を見て言った。

「野江、悪いが対処してくれないか？佐久と都南以外は入れるな」
「分かりました」

野江は紅に一度、頭を下げて廊下へと駆け出した。

状況が整理できず、身動き一つ取れない悠真を横目に紅は義藤に歩み寄り、容易く膝を折ると、義藤の肩を揺すった。その姿が、色神紅の印象とかけ離れていた。彼女は紅のはずだ。赤い色に愛されている。彼女が放つ赤い色は、誰よりも美しく、力強い。そんな紅が使用人の義藤のために容易く膝を折のは、とても意外な光景だった。

「義藤、義藤。大丈夫か？」

義藤は小さくうめき声を上げて、慌しく体を起こした。義藤は抜き身の刀のような顔立ちをしている。目も、声も、仕草も品が良い。義藤は良家の息子かもしれない。荒々しいのに品が良いのは、彼の育ちでなく生まれが良いからだろう。

「紅！」

そして義藤は素早い動作で刀をつかんだ。

「義藤、問題ない。悪かったな、危険な目にあわせて。協力してくれてありがとう。ほら、義藤の石。騒ぎは野江が対処している」

言って紅は、義藤の石を彼に返した。義藤が心底安堵したように、深く息を吐いた。

「信じられない、俺の石を使うなんて」

警戒の色を隠しきれない義藤を紅が止めた。

「信じられないから、ここまで連れてきた。そして、試したんだ。柴が加工した義藤の石を目の前に出して。義藤も目の当たりにしただろ、自分の石を使う様子を」

紅が言い、義藤はそれ以上何も言わず、彼女は立ち尽くす悠真に言った。

「私だって、好き好んで村が滅びるのを受け入れたわけじゃない。最善の策を練り、全力を尽くした。それが、この悲惨な結果だ。名前は悠真だったな。私は野江から報告を受けた。惣次の石を使い、村人を守った者がいると。だから、私は野江に命じたんだ。その奇妙な力を眠らせておくか、自らの意志でここへ来るか決めさせると。そして悠真はここに来た。その力も証明した。安心しろ。野江が情報を持ってきた。必ず犯人は見つけ出す」

義藤は不審そうに悠真を見たが、何も言わなかった。彼にとって、紅が全てであるようだった。

「紅、それよりもどうやって誤魔化すつもりだ？騒ぎ立てられるぞ」悠真に対する警戒を解いていない義藤は散らかった辺りを見渡した。

「そうだな、義藤。後は任せた」

紅は優雅に微笑み、呆れているのは義藤だ。

「まったく、あなたはいつも無茶をする。小猿の力を試すとか言つて、わざと苛立たせるようなことを言つて……」

不満を口にする義藤を紅が一喝した。

「義藤、黙っている」

二人の間に、色神と護衛以上の親密さを悠真は感じた。

義藤は慌しく部屋を片付け始めた。畳を元の場所に戻し、壊れた物を小部屋のさらに奥へと押し込めていく。同時に、新しい物と次ぎ次と出していく。誤魔化しきれない場所は、物を動かし器用に隠していく。慣れた動きが印象的だった。

「紅、すぐに片付けられないところは、後で佐久と都南と一緒に片付ける」

紅は部屋の中央に座り、慌しく動く義藤を見ており、悠真は相変わらず、部屋の片隅で立ち尽くしていた。

しばらくして野江が戻ってきた頃には、部屋はすっかり片付けられ、野江は片付けられた部屋を見て苦笑した。

「義藤、あなた片付けるのが上手になっているのね」

義藤はむっと押し黙っていた。もしかしたら、義藤は片付けに慣れているのかもしれない。

「野江、悠真を連れて行ってくれ。村を滅ぼした犯人は、必ず再び動き出す。今度は、私を狙ってな」

紅は不敵に笑った。

「それよりも、遠爺。惣爺が死んだ。休んでも構わないが？」

紅は黙って控えていた惣次に良く似た男に言い、男はゆっくりと口を開いた。

「惣次は二年前に死んだ。今更、何も変わらない。ただ、惣次の便りに書かれていた美しい村が滅び、気の良い海の民が死に、気の合う子供が無茶をする小猿になってしまったことがとても虚しいだけだ」

男は惣次と良く似た顔で、惣次と良く似た声で、惣次と良く似た口調で言った。悠真は男と惣次の関係が気になった。男は惣次と便りを交わす仲だ。悠真の知らない惣次を知っている。なのに、惣次が死んだことに涙一つ見せず、平然としている。それがとても機械的で、無感情のように思えた。

「野江、最初に小猿を連れて来ることを決めたのは、野江だ。相手をしている」

惣次と良く似た男は、悠真のことを「小猿」と呼んだ。惣次と似ているからこそ、無性に悲しくなった。

赤の仲間（１）

悠真は野江と共に紅の部屋から退室した。義藤は退室するのも気に留めず、さらに片づけを続けていた。どうやら、義藤は生真面目な性格らしい。悠真と共に退室した野江は悠真を連れて歩いた。泥だらけの悠真は、野江の命令で風呂に押し込められた。田舎物の悠真が初めて見る大きな風呂場だった。初めて使う大きな石鹸と麻布で体を洗い、湯船を使うと体が温まり、心がほぐれた。湯に入っていると、先ほど会った紅の姿が悠真の脳裏に浮かんだ。理想の姿その一と呼んだ、第一印象。赤色が誰よりも似合う存在。強く何者も恐れないような第二印象。赤色が鮮烈に蘇り、心を赤色に染めていく。

「赤、赤、赤……」

悠真がつぶやくと、風呂の中で大きく反響した。

——のう、我が器は美しかる。

同時に赤の声が響いた。突如、湯煙が赤く染まり、湯の上に赤が座っていた。赤い着物に赤い髪。赤い瞳が悠真をしかと見つめる。

「あんた、いったい何者なんだよ」

悠真は赤に言った。赤はにいつと笑い、赤い扇子を開き口元を隠すと、けらけらと声を出して笑った。

——まさか、小猿が義藤を上回るとはの。紅も想像しておらなんだったじやろ。紅の慌てる様子と言ったら……

赤は嬉しそうに笑っていた。

——赤。それが我が名じゃ。我が器の紅は美しかる。我が色に染まれ。

言った赤の目は鋭く悠真を見据えた。

——赤が小猿を守ろうぞ。我が紅も小猿を守ろうぞ。我が色に染まれ。さすれば、赤が小猿を守ろうぞ。されど、小猿が赤を選ばぬのなら、我は小猿を守らぬ。何ゆえ、我が利益にならぬ小猿を守るの

じゃ。ゆめゆめ忘れるでないぞ。我が色の力を欲するのなら、我が色に染まれ。

赤は鋭く言い放つと、ゆっくりと向きを変えた。

――機会があれば、また会おうぞ。

赤が言うつと、赤い世界が消えた。そこには、白い湯煙があるだけだ。

赤との対話からのぼせはじめた悠真は湯から出ると、用意された着物を纏った。汚れ一つ無い仕立てられたばかりの着物を、着て出ると、そこには紅城の使用人の女性が待っていた。仕立てられた着物は染み一つなく、田舎者の悠真は新しい着物を初めて着た。

「陽緋様がお待ちです」

待っていた使用人が悠真に言った。誰も野江を名前で呼ばない。つまり、悠真はとても失礼なことをしているということだ。それと同時に、陽緋などのように感じているのか不安になった。誰も本当の野江を見ていない。もし、悠真が野江の立場からきつと辛く孤独に感じるだろう。使用人に連れられて歩く廊下は、野江と歩いた廊下と違って見えた。陽緋野江も赤を持っている人物だから、野江が一緒でない廊下は紅城の中の色を殺風景にしまうのだ。紅城は人の気配に乏しく、悠真は誰にもすれ違うことなく紅城の一室に案内された。

部屋の片隅で野江が座っていた。背筋を正し、正座をする野江はとても赤が似合った。物の少ない部屋には、小さな書卓と積み重ねられた書物が置かれていた。

「見違えたわね」

使用人は、悠真が部屋に入ると何も言わずに下がった。

「お座りなさい」

野江が言い、悠真は戸に近い隅に座った。戸に寄りかかっていると、すぐに出口がある安心感があつた。悠真の考えに気づいたのか、野江は笑った。

「紅に会ってどうだったかしら？」

野江の言葉に引き出されるように、悠真は脳裏に強烈に焼きついた、高貴で高圧的な紅の姿を思い出した。

「印象と違ったでしょう？紅は賢い子よ。生き残るための術を知っている。だから、理想の紅像その一、その二と作り出し、いくつもの紅を演じられるのよ。それに、義藤のことを嫌いにならないでちょうだい。義藤は、若いけれど有能な子よ。天性の才能に加えて努力を惜しまない性分なの」

野江の言葉の一つ一つが、悠真の中で大きな波紋を作り出していた。紅を思う野江の気持ち、そして野江が義藤を信頼していること。彼らは、強い絆で結ばれている。

悠真が野江に返事をしようとしたときだ。悠真が寄りかかっていた戸が突然開いたのだ。

「野江！」

入ってきたのは、二人の男。野江の名を呼んだ一人が悠真の存在に気づかず、悠真に引つかかって派手に転び、悠真は上に押し掛かる重みで身動き一つ取れなかった。悠真の上に倒れた人物も起き上がるうと必死にもがいているようだったが、それが上手くいっていない。どうして、人の上から起き上がるだけで、苦労するのだろうかと思議に思うほどだ。

「どけ、どけ。どけよ」

悠真はもがく男の下で、必死に言ったが、重みで思うように声にならなかった。失礼かもしれないが、悠真と彼らの面識はなく、遠慮をする必要もない。赤い羽織が視界の端でひらめき、彼らも悠真が容易く言葉を交わすことが出来ない存在なのだと教えられた。

「野江、これが義藤を吹っ飛ばした小猿だな」

二人のうちの一人、転ばなかった方が悠真の上に押し掛かった男に手を貸しながら言った。入ってきた二人とも、赤い羽織を纏っていた。彼らも、紅に信頼される存在なのだ。野江を名で呼んでいることから、彼らの立場が分かる。

「佐久は相変わらずだこと」

野江は転んだ男を見て笑っていた。悠真は笑う野江を初めて見たような気がした。

「話を誤魔化すなよ。俺たちを差し置いて、楽しい話を進めているみたいじゃないか」

手を貸した男が言った。手を貸した男は長身で浅黒い肌が印象的だった。その強い目に見られて、悠真は思わず目をそらした。まるで強い獣を目の前にしたような気分だ。目を引いたのは、帯刀した朱塗りの刀。野江や義藤がもっている朱塗りの刀より大きく、力強かった。

「それよりも、悠真を起こしてあげてちょうだいな」

野江が言い、男は悠真にも手を貸した。男の手は、漁師の手のように厚く大きく、力強かった。

「紹介するわ。彼が都南。紅の持つ軍である朱軍の將軍。朱將の都南よ。剣技や馬術、あらゆる武術、そして策略に優れているわ。術士の才覚を持たず、朱將になったのは都南以外に存在しないわ」
どうも、と手を貸した方の男が言った。そして彼は野江を睨んだ。

「野江、その紹介は術を使えない俺に対する嫌味か？」

長身で日に焼けた肌が快活そうな男だ。この紅城に、術を使えない人がいることに悠真は安堵した。紅城は赤い空気で満ちている。使用人も紅の石を首から下げている。悠真は今まで、一人だけ術士でないことに不安を覚えていた。だから、都南が術士でないことに安堵し、同時に術士の才覚を持たない彼がどのようなにして朱軍に入り、朱將にまで上り詰めたのか不思議に思った。濃紺の着物に、赤い羽織が美しい。野江と同じくらいの年齢だろう。落ち着いた大人の印象だった。都南の目は獣のように鋭いが、今は穏やかな表情を浮かべていた。

「僕も忘れないでおくれよ」

言ったのは、派手に転んだ男だ。小柄で希少な眼鏡をかけている。優しそうな印象。薄青の着物に、やはり赤い羽織が栄えている。都

南と親しげで、同年齢ほどだろう。

「あちらは佐久。主に研究や分析を担当しているわ。術士としても、灯緋の力を持ち、あたくしに次ぐ術士。他色の石を紅の石と同じく、らいの威力で使用できる数少ない存在よ。他国の情勢や歴史に詳しく、歩く書物のような存在ね。唯一の欠点は、壊滅的なほど運動能力が低いこと」

どうも、と佐久は眼鏡を直しながら言った。

「野江、僕に嫌味は効かないよ。全てを受け入れているからね」

柔和な顔つきをした彼は、楽しそうに笑った。他人を怒鳴ったり、憎んだりすることに縁遠い存在のようだ。紅は仲間を持っている。悠真が出会ったのは、きっと一部だろうが、赤が似合う人たちばかりだった。

赤の仲間（2）

術士は五つの階級に分けられる。最も強い力を持った存在が陽緋。術士の中でも一人だけしか名乗れない。陽緋に次ぐのが灯緋。そして、大緋、中緋、小緋、下緋とつながる。大部分が下緋だ。小緋以上は、幹部地位である。まるで仏のような笑顔をしている佐久は灯緋、とても優れた存在なのだ。

「そうだったわ、悠真には義藤のことも、紹介していなかったわね。義藤は紅の護衛を担当する朱護の筆頭、朱護頭。あの若さで朱護頭なのだから、行く末が恐ろしい術士ね」
都南が笑いながら言った。

「ずいぶん義藤を買っているんだな。義藤には嫌味の一言も無いのか。数年後には、陽緋の地位を奪われるかもしれないぞ。歴代最強の陽緋と言えど、その上がいないという保障はないんだからな。義藤は努力を惜しまぬ天才。その才は紅城へ足を運んだ瞬間から明確だった。最近、体が鈍っているんじゃないか、陽緋殿？」

まるで、先ほどの仕返しをするかのように、都南は笑い、白い歯が浅黒い肌に栄える。野江は動じることなく切り返した。野江の方が一枚上手だ。

「あたくしの心配をしてくださってありがとう。でも、数年後には朱将の地位を奪われるかもしれないよ。今は若い義藤も、いずれ成長するわ。剣技だけでなく、知識や判断力も兼ね備えるでしょうからね。お気をつけて。術を使えない朱将都南様。紅が義藤を陽緋に任ずるか、朱将に任ずるのか、まだ分からなくてよ。あたくしの心配はご不要よ」

一番笑っているのは、佐久だった。

「底知れぬ嫌味合戦だねえ。朱将も陽緋も短命なんだから、変な冗談はよしなよ。まあ、朱将と陽緋が別人でなければならぬ、という決まりはないんだから、どちらも地位を奪われるかもしれないよ。」

でもね、きつと紅はそんなことしない。二人がその職を続けたいと願っているうちはね」

佐久が笑いながら二人に言った。穏やかな表情をした佐久が最も腹黒い存在なのかもしれない。

悠真は不思議に思った。野江も都南も佐久も、とても親しげにしてくれる。彼らが悠真に敵意を向けていないことは明らかだ。都南が小さな台を出し、陽緋が箱から茶道具を出し、茶を淹れてくれた。さすが陽緋ということだろう。湯を沸かすのも石の力で瞬く間だった。このように、生活場面で石の力を使用するにはからくりが必要だ。悠真はただの鉄箱にしか見えないものに紅の石を入れることで、鉄箱が竈の代わりをすることが信じられなかった。彼らは悠真のことを気にすることなく談笑していた。些細な甘味も出された。田舎者の悠真が口にしたことのないような甘味。佐久は何食わぬ顔で、都南の甘味をつまんでいた。どうやら、佐久は甘味に目がないらしく、都南と佐久は親しいようだ。まるで、都南は佐久の保護者のようだ、悠真は感じていた。

彼ら紅の信頼する人たちは、立場のある人なのに使用人を使わない。彼らは、彼ら仲間の世界を作り出しているのだ。まるで、他人を警戒しているようであった。他人を警戒しているのに、悠真に警戒することはない。この場に最もそぐわない田舎者の小猿を、彼らは当然のように受け入れている。それは紅にも言えることだが、とても奇妙で不思議なこと。

「どうして…… どうして俺に警戒しないんだ？」

耐えることが出来ず、悠真は紅から信頼を得ている彼らに尋ねた。すると、佐久が笑った。敵意のない、優しい笑いだ。

「当然だよ。悠真君は、惣爺が認めた人で、惣爺が信頼した人だからね」

悠真は不思議に思った。どうして彼らは、只の下緋である惣次のことを知っているのだろうか。彼らにとっては、惣次は足元の存在のはずだ。術士の世界で年齢が関係あるとは思えない。関係あるのは、

力だけのはず。若い野江が陽緋であることが一番の証拠だ。

「惣爺が信頼した人に、悪い人はいないってか」

都南がお茶を一口、口に含んだ後に言った。

「どうして、惣次のことを……」

悠真は分からなかった。都にいる彼らが下緋の惣次を知るはずがない。野江は柔らかに微笑んだ。

「当然のことよ。惣爺は、あたくしたちの戦いの師匠。灯緋としての力を持ち、先代の、そして先々代の、そのまた前の陽緋の師匠でもあるわ。あたくしも、佐久も、もちろん義藤も、惣次に術と剣技を教わったのよ。あら、都南は剣技だけで、佐久は術だけだったわね」

野江は思ったより嫌味が多い。美しい彼女に似合わず、悠真は笑いそうになった。しかし、その内容に戸惑って野江の嫌味に触れることはできなかった。惣次が野江たちの師匠。術に優れた存在である。その内容はにわかに信じられなかった。野江は紅の石を触りながら言った。

「紅だって、惣爺を慕っていたわ。惣爺と……悠真も会ったでしょ。惣爺と双子の遠爺。あたくしたちは、惣爺から戦い方を学び、遠爺から学を学んだわ。二人は、紅城の両腕。あたくしたちは二人に守られて育ったわ。二年前に惣爺が戦いで深手を負い、術士として十分に戦うことが出来なくなるまではね。惣爺は戦えなくなっただわ。だから、惣爺を守るために、別の生き方を渡したのよ。それは、数十年にわたり紅城を支え続けた、二人の夢。一足先に、引退した惣爺が新しい人生を手にした。誰も反対したりしないわ。だって、それが惣爺への、せめてもの礼なのだからね」

悠真は惣次の姿を思い浮かべた。祖父と酒を酌み交わし、高らかに笑う惣次。その惣次が彼らの師匠だということは、容易く信じることなど出来ない。野江たち彼らは赤い羽織を許された存在。悠真が容易く言葉を交わすことは許されない。そんな彼らと惣次を結びつけることが、悠真には出来なかった。しかし、彼らが、紅が、悠真

に対して警戒しないのは、悠真が惣次と親しいから。そう思うと、
全て納得がいく。

——術士はいいことばかりでない。

惣次の言葉が悠真の胸に響いた。惣次は優れた術士であり、紅を支える存在を多く育ててきた。その言葉は重く、悠真にのしかかった。同時に悠真は惣次がとても遠い存在のように思えた。気安く、誰よりも信頼していた惣次。その惣次が悠真に隠し事をし、遠くにいる嫌な気分だ。そして、遠次という男と惣次は双子だから似ていて当然だ。

「惣爺が信じた。それだけで、俺たちには十分な理由なんだ。きっと、義藤もそれを分かっている。そうでなきゃ、顔を合わせた瞬間に殺されない程度に斬られているさ。紅が止めようと、関係ない。義藤は紅を守る存在。そして、あいつは、強いからな」

都南が言った。都南も野江同様、義藤を認めているのだ。

美しく強いが嫌味の多い野江。術の使えない朱将の都南。術と知識は一流だが体を動かすことが極端に苦手な佐久。抜き身の刀のような強い存在義藤。彼ら若い実力者に知識を与えて守り育てた遠次。そして、彼らに戦い方を教えた死んだ惣次。ここには紅を守る赤の仲間たちが集まっているのだ。

赤の真実（１）

赤の仲間たちは笑い、一人笑みを浮かべた佐久が言った。眼鏡の奥の佐久の目が優しく、そして強く輝いた。

「それで、どうして悠真君は紅城に来たんだ？殺されに来たようなものだよ。僕たちでも、必ず守りきれるとは言えない。ここは決して安全な場所と言い切れないのだから。今なら間に合うかもしれないよ。自分の身を守る術を持たないのなら、どこか、故郷と離れたところに逃げた方がいい」

悠真はどうして、そんなことを言われるのか分からなかった。悠真には帰る故郷も、家族もないのだ。これから生活をする糧も基盤も、悠真には何もない。故郷を失った小猿が生きるには、どこかの名家に奉公に出るか、低賃金で働き続けるか、盗賊になるしかない。「帰る場所はない。俺にどうやって生きろって言うんだ？俺は、生きる場所も、生きる道も奪われたんだ。だから俺は、復讐するまで諦めない。あの嵐が、誰かの手によって起こされたものだと思ったときに決めたんだ。じつちゃんを、惣次を殺した奴をこの手で捕まえるまで、絶対に帰らない」

悠真が言くと、都南がぱちと手を叩いた。その表情からは何も読み取れない。浅黒く日焼けした肌に、白い歯が印象的だった。なのに、少しも笑っているように見えない。怒りだけが伝わってきた。獣の目に鋭さが満ちてゆく。

「立派な決意だが、とても愚かな小猿だな。お前は何も分かっていない。紅には敵が多く、その敵はとても強大な力を持ち、常に紅の命を狙っている。だから俺たちは、この命を懸けて常に紅を守る。先代の紅も殺さ時のことを、俺は忘れられない。もつと、力があればと何度悔やんだことか……。二年前の戦乱のことを、今でも夢に見る。俺は、今の紅を失いたくないんだ。紅は象徴でなく、一人の命だ。決して誰にも代わりを務めることなんてできないのだから」

それは信じ難いことだ。紅は色神だ。赤を司る色神であり、紅の石を生み出すことが出来る唯一無二の存在。誰もが紅を紅と崇め奉る。その地位は絶対的なもので、紅は神と同格だ。紅に従う者は多い。人民の大半は紅の味方だ。

「そんなはずは……」

悠真が思わず言った。すると、佐久が言った。穏やかだけれども、強い意志が込められていた。

「そんなことがあるんだよ。悠真君、色神がどのように生まれるか知っているかい？」

悠真は首を横に振った。すると佐久は一つ息を吐き続けた。

「悠真君は、惣爺が信頼した人だ。だから、僕たちも君を信じてこれを話すよ。いいかい、色神は普通の人間だ。誰にだって色神になる可能性がある。色神が命を落とすと、最期に生み出した石が、次の色神を選ぶんだ。紅だって、元は只の人間。義藤とは幼馴染だった。言っていたよ。紅は十歳の頃に色神になった。今から十年前の話だ。その頃のことは、僕たちも覚えているよ。僕と都南は十八だった。野江だって、十九だ。僕らは着実に力を付け始めていた時期だからね。僕と野江と都南の三人で陽緋と朱将と朱護頭の地位を取り合っていたんだ。先代の紅は、気の優しい男性でね、僕らは彼を父のように慕っていたよ。今の紅とは対照的な。平和を愛し、子供を愛していた。それは、先代が紅になって十三年目のこと。当時、官府と先代は、他国との関わりでもめていたんだ。官府は他国と協力して、一国を攻めようと考えていた。火の国は小さな島国でね、広大な大地は夢のような話だ。けれども、それは他国の人を殺し、火の国の人を殺す大きな戦いだ。先代の紅は反対したさ。そして、殺された。紅が反対しては、民が従わない。だから、殺したんだ。僕たちはとても無力で、守れなかった。遠爺も惣爺もだ。官府は先代の紅を殺し、次の言いなりになる紅を生み出そうとしたんだ。先代が殺された後、今の紅は誕生した。今の紅は若いが聡明で、微力ながら僕たちもいる。義藤がいる。だから、十年もの間、紅とし

て生き延びてきたんだよ。官府に従うこともなく、官府の怒りを買うこともなく、綱渡りをするようにね」

悠真は佐久の話が信じられなかった。先代が命を落とした時のことは、悠真も微かに記憶している。誰も海に出ず、喪に伏した。その死がなぜ生じたのか、死んだ紅がどのような人だったのか誰も知らない。そして、すぐに忘れられた。村の人は紅が死ぬのは珍しくないと話していた。そんな話をすると、罰当たりだと表立ってしないが、誰もが声を潜めて話していた。紅は神だが短命だ。

——紅は生まれて、命を削って石を生み出す。死した後は、再び生まれる。

そんな噂が流れるほどだ。紅がただの人間だと誰が信じるだろうか。民にとって、紅は唯一無二の色神なのだ。汚い言葉で言えば、紅が誰であるうと関係ない。死のうと生きようと関係ない。生活を支える石を生み出してくればそれで良いのだ。その考えは悠真にもあった。今日、紅と出会い、あの鮮烈な赤色を見るまでは、紅に興味もなかった。十年前に死んだ紅も、同じように美しい赤を持っていたのだろう。世間上では紅が火の国の頂点に立ち、官府は紅に従っているはずだ。しかし、現実が違うのだ。紅は綱渡りをするように、必死に生きているのだ。

悠真は何も言えなかった。静かな動きで都南が赤い羽織を正した。「俺たちがこの赤い羽織を着ているのは、紅への忠誠の証だ。この羽織は、官府と敵対する証。紅に忠誠を誓い、最優先で紅の命に従う。紅を裏切る行為があれば、親兄弟一族を差し出す覚悟。紅の槍となり、紅の盾となる。色神として誕生した紅が、信頼できる者を選別し、赤を差し出す。俺たちは今の紅から赤を授かった。遠爺も同じだ。遠爺に関しては、先代からも赤を授かっていたらしいがな。小猿の知っている惣爺は二年前の戦いで深い傷を負い隠居した。その戦いも、紅を殺そうとした何者かとの戦いだ。紅はそれだけ命を狙われている。これが、民の知らない真実。この羽織は重い。紅と

命を共にするという決意の表れだからな」
都南の話を、悠真は信じる事が出来なかった。紅は色神だ。民は讃えている。そんな紅が命を狙われているわけが無い。そう思ったが、悠真は自分も紅を象徴としか思っていないかった。紅が命を落とすとして、次の紅に代わったとしても、あまり気にしない。紅は存在するだけでいい。誰が紅でも関係ない。そういう考えが、歴代の紅を危険にさらしてきたのだ。悠真は動揺を隠しきれなかった。あの、高貴で鮮烈な赤を放つ紅が、命を狙われることが信じられず、赤の仲間たちが命をかけて、強い覚悟をもってここにいることが信じられなかった。

赤の真実（２）

紅が命を落として、次の紅に代わったとしても、あまり気にしない。紅は存在するだけでいい。誰が紅でも関係ない。そういう考えが、歴代の紅を危険にさらしてきたのだ。悠真は動揺を隠しきれなかった。悠真も同じ罪を持つ。そんな罪深き悠真に、佐久は言った。「官府は今、紅に一つの要求を突きつけている。紅はその要求を拒否し、悠真君の村は壊滅に追い込まれた」

深刻な目で、三人が悠真を見ていた。それでも悠真は己の覚悟を捨てることは出来ない。多くの人の命と、悠真の故郷よりも重要なものがあるだろうか。誰もが教わるはずだ。命よりも重い物はないと。どんな金銀財宝も命よりは軽いと。

「俺の故郷よりも、大切なものがあるのかよ。人の命よりも大切なものがあるのかよ」

悠真は言い野江が返した。

「紅だって、容易く拒否したわけじゃないのよ。要求を拒んだときから、何かをされると感じていたわ。それを回避しようと全力を尽くしていたことは事実よ。紅は最善を模索し、悩みながら決断した。その責任を己の肩に背負う覚悟をしてね。悠真、お聞きなさい。官府はね、石の監視を止めるように申し出てきたのよ。正確に言えば、石の監視をする力のある紅の石を差し出すように申し出てきたの」

「石の監視……？」

悠真はその意味が分からず、佐久が教えてくれた。

「紅はね、一つ希少な石を持っているんだ。それは、紅が誕生して最初に生みだす石だよ。生み出した紅が命を落とさない限り決して色を失わず、どの石よりも強い力を持つ。その石は、己が生み出した全ての石を監視することが出来る。いつ、どこで、どのように、どの程度の力が使われたのかをね。紅の石は無限に使うことができる」

るわけじゃない。紅が長命になればなるほど、紅の監視から逃れることが出来る石は少なくなる。それを快く思わないんだろうね」

佐久が置いた湯飲みが、小さく音を立てた。そのまま、佐久は続けた。

「いいかい、悠真君。監視が出来ないということを考えてごらん。

誰かが、紅の石を欲望のまま他者を傷つけるために使用したとする。それが分からないんだ。紅の石は、強大な力を生み出すことが出来るでしょ。その力を個人の思うように使わせてはならない。だから紅は、己の使った石がどのように使われたのか、誰が作り出したのか監視をしている。紅の石の力を悪用されれば火の国を滅ぼしかねないから、紅は石の監視を止めることができない。つまり拒むしかできなかったんだ。石の監視が、紅の石の悪用を防ぐ唯一の抑止力なんだ。けれども、官府の要求を拒むことに対して紅も悩み、野江を派遣して警戒していたんだ。悠真君の村が狙われたのは、きっと惣爺の存在に気づいたからだよ。あの村に惣爺がいるから、狙われた。惣爺は紅が信頼する人物の一人。二年前の戦いで、紅を守って力の大半を失ったのだから」

悠真の脳裏に優雅な紅の姿が浮かんた。煙管を持ち、紅色の着物を着た彼女が、葛藤を抱えているとは思えなかった。彼女は何も恐れるものがなく、揺るがない自信があるように思えたのだ。誰にも屈しない高貴な存在。高貴な赤色を司る色神。それが紅なのだ。

「俺にとつては、村が一番だ」

悠真が言くと、野江は着物の袖口で口元を隠した。嫌なものを避けるような仕草だった。

「そうでしょうね。人の命より重いものは無いのだから。それでも紅の石を自由に使われてはいけないのよ。官府が勝手に他国と戦争を行わないようにするためにね」

野江の言葉が悠真の胸に重く残ったが、悠真は「しかたなかった」

「紅も苦しんでいる」「最善の選択をした」と己を納得させることは出来なかった。今の悠真は復讐心で動いており、憎む気持ちを捨

ててしまつたら何も出来なくなる。全てを失い、廃人となつてしまふ。己が己で無くなる恐怖。自分の生きる道標を失う恐怖。それらが悠真を頑なにしていた。紅を憎まなければ、己が生きる意味を失つてしまふ。紅は、悠真が憎むべき相手。時に他者を憎む気持ちは、何よりも強い生きる糧になるのだから。

妙な沈黙があつた。紅に忠誠を誓う人たちの中に紅を憎む悠真がいる。それは、奇妙な状況。妙な空気を打開するように、それはそうと、と口を開いたのは都南だつた。

「それはそうと、野江。俺に小猿を預けてみないか？」

都南の唐突な言葉に、悠真は息を呑んだ。都南の強い目が一直線に悠真を見て、悠真は何も出来なかった。獣に睨まれた兎のような気分だつた。野江が言つた。

「あら、朱軍にでも入れるおつもりかしら？物騒ね」

野江は小さくお茶をすすつた。小猿「悠真」は、彼らの話題の一つではない。

「じゃ、術士にするか？陽緋殿」

都南が豪快にお茶を口に含んで言つた。止めなよ、と静止したのは佐久だつた。

「二人とも止めなよ。どうして、朱将と陽緋という立場になると仲良く出来ないんだ？二人が喧嘩するなら、悠真君は僕が連れて行くよ。悠真君はまだ石を持っていないから、術士とか朱軍に入る必要はないからね。紅もそれを望んでいるよ。厳しい野江と一緒にいるのも、粗暴な都南と一緒にいるのも疲れるだらうからね」

野江と都南の二人が佐久を睨んだ。第三者である悠真が緊張するほどの緊迫感なのに、佐久だけが平然とし、甘味をつまんでいた。

「そんなに怒つたつて無駄だよ。僕に任せなよ」

佐久が湯呑みの中のお茶を回していた。佐久の眼鏡の奥の目が優しく見えた。温かいけれど、とても強い目。悠真は不思議だつた。赤い羽織は、紅と命を共にする証。赤い羽織を着ているだけで、紅と同類とされて暗殺されるかもしれない。陽緋や朱将ならば、赤い羽

織を着る必要も分かる。部下の信頼を集めるためにも、自身の長が紅からの厚い信頼があると思わせる必要がある。赤い羽織は重い。

佐久は術士としては灯緋としての実力があるとはいえ、陽緋や朱将のような大きな役職を得ていない。なのに、どうして彼は赤い羽織を着ているのだろうか。赤い羽織を着ているのは、彼の力を示すと同時に、彼自身が紅、陽緋、朱将から大きな信頼をもたれていることが分かる。穏やかで優しい目の奥に、隠された強さがある。

「好きになさい」

根負けしたように野江が言った。

「好きにしる」

都南が憮然として言った。佐久が笑った。まるで子供のような笑い方だった。

「ありがとうね。悠真君も良いね？」

佐久に言われて、悠真は頷いた。赤い羽織を着た三人に囲まれて、拒否することなど出来るはずもない。

「それで、佐久は今日、自邸に戻るのかしら？」

野江は佐久に尋ねた。

「いいや、官邸に残るよ。青の石がどこから運ばれたのか調べないと。それに、野江の行く手を阻んだ紅の石を使った人を特定しないといけない。悠真君は官邸に泊めるよ。武術が駄目な僕でも、官邸だったら守りきれる」

佐久が言い、都南が苦笑した。

「一人で走るな。お前は壊滅的に身体を動かすことが駄目で陽緋になれなかったんだ。一人で抱え込むな。俺も一緒に泊まるう。どうせ暇なんだ」

都南が気安く佐久の肩を叩いた。悠真は、朱将はそれほど暇なのかと感心した。一つ溜め息をついて、野江が言った。

「また、あたくしを仲間はずれにするのね。いいわ、あたくしは、あたくしの好きにするから」

野江は残っていたお茶を一気に飲み干した。高貴な雰囲気野江と

は思えない、荒々しい行動だった。

赤の茶会（１）

悠真は赤い羽織を着た人たちは、なんとも変わった人たちだと思った。悠真の前を、陽緋の野江、朱将の都南、そして佐久が歩いている。目の前を高貴な色である赤が、ゆらり、ゆらりと揺れている。初めて赤い羽織を見た時、とても美しい色だと思った。しかし、今は違う。赤い羽織が意味する重み、若い彼らが背負っている重み、紅が敵か味方か、悠真は何も分からない。そんな中で、赤い羽織を着た人たちは、なんとも平然としているのだ。大きな責任と重圧の中で、紅を守ろうとしている。悠真にとって、紅は敵である。彼らは紅を守ろうとし、悠真も守ろうとしている。赤い羽織を着た人たちは、なんとも変わった人たちだ。彼らにとっては、紅城で復讐に息巻く悠真が、とても変人に見えることだろう。赤い羽織は神の力である炎のようで、命の源である血のようで、人々に希望を与える太陽のようであった。悠真が出会った、赤い羽織の人たちは五人。野江、都南、佐久に遠次、義藤を加えた存在だ。紅の周りには若い人たちが多い。悠真は彼らの話から、それぞれの年齢を推察していた。遠次の年齢は不明だが、野江は二十九、都南と佐久が二十八、義藤が二十二ぐらいのはずだ。若い彼らが、紅を支え、火の国を守ろうとしている。

紅城は、紅の住まう大きな建物を中心に数十の建物で構成されている。悠真は、これが、紅の重臣が与えられている官邸なのだと理解した。

佐久は、何も無いところで何度も躓き、その度に都南が支えていた。長身の都南と小柄の佐久の間には大きな身長差がある。その身長差を、悠真はじつと見つめた。何も無いところで、佐久が五度目に足を取られたとき、突如として悠真の後ろで声が響いた。いきなり空気のように生じ、背後に赤い色が揺らめいた。

「ほら、またこけた。もう少し身体能力が高ければ、いや人並みに

動ければ、陽緋候補として野江に並べたのにな。なんせ、佐久は紅の石以外の色の石を容易く使うことができる。他色の石を使わせれば、野江を越える。身体能力だけの都南と術だけの佐久。足してちょうど良い」

悠真の耳元で、囁くような声が響いた。赤い色が広がっていく。その声に、悠真の前を歩く、赤い羽織を着た三人が同時に振り返った。慌てて、焦ったように。振り返った拍子に、再び佐久が足を取られ、都南が佐久を支えた。

「ほら、まただ」

赤い声はけらけらと嬉しそうに笑っていた。悠真は振り返ることさえ出来ない。濃厚な気配が後ろにあるのだ。誰よりも鮮烈な赤い色が悠真の肩に手をかけていた。佐久が足を取られるたびに、嬉しそうに笑うその声が赤く響き、悠真は振り返ることが出来ない。

「ああ、ばれてしまったな。怒らないでくれよ」

悠真は何も言えない。動けない。そこにいるのは、間違いない。間違はなく紅だった。声が同じだ。濃厚な気配が同じだ。香りが同じだ。鮮烈な赤い色が同じだ。紅を思うと憎みがこみ上げて来る。悠真の村を守れたのに、守らなかった。紅が滅ぼしたのだ。紅の境遇を知っても、悠真の憎しみは変わらない。なのに今、紅に対して怒りをぶつけることが出来ない。梅雨時のじめじめした空気を吹き飛ばすような、そんな赤に惹かれていたのだ。

「どうして、こんなところにいるのですか？」

慌てたように野江が言った。

「また、義藤を困らせたんだろ。悪いが、俺たちにまで迷惑をかけるな。義藤に怒られるからと、俺たちを盾にするなよ」

都南が言った。

「僕はそこまで運動音痴ではないけれど」

佐久が言った。悠真の後ろの気配は、嬉しそうに笑った。声が赤く花開く。

「だってさ、ずっとあそこにいると息が詰まるだろ。心配するな」

気配はゆつくりと悠真の隣を通り過ぎ、前に躍り出た。高い位置で髪を一つに束ね、着物に紅は含まれない。化粧をしていない顔は、野江ほど華が無いが、不思議と心を惹かれた。女物の着物を着ているが、質素な着物からは紅の姿を想像できない。あの、高圧的で高飛車な雰囲気は感じられないのだ。彼女は悠真の隣を通り過ぎ、そして振り返り悠真を見つめた。

「この顔、誰か知っているか？」

彼女は無邪気に微笑んだ。

「どうして……」

悠真は言葉を失った。憎んでいるのに、目の前になると怒りをぶつけることが出来ない。

「楽しそうなことをしているみたいだからな。私だけを仲間はずれにするなよ」

彼女は微笑んだ。

「こっちへ来い」

都南が彼女の腕をつかみ、引きずるように歩いた。

「おいおい、乱暴に引っ張るなよ」

紅はけらけらと、笑っていた。赤い笑いが辺りに輝いた。野江も佐久も都南を追いかけて歩いていた。悠真も赤い羽織の人たちと、赤を司る色神を追いかけて歩いた。

赤の茶会（2）

たどり着いたのは、官邸の一つ。部屋の主に断りを入れることなく、都南と野江は足を踏み入れ、部屋の主であるはずの佐久は時々足を敷居に取られてつまづきながらたどり着いていた。そこは、難解そうな書物と埃で溢れ、三部屋あるうちの一つは書物で溢れ、一つは仕事部屋と寝室のような場所になっていた。最後の一つに食卓や来客用の茶具が置かれて、日に焼けた畳が紅城の内部にある官邸にそぐわず、この部屋の主は、栄華や人目を気にしない存在と示していた。佐久の人と柄が、部屋の様子から伝わってきて、悠真は思わず佐久を見つめた。佐久はとても優しい。狭く散らかった部屋は、失った悠真の実家を思い出させた。紅城の中では異質なほど散らかり、生舎者の悠真は肩が凝るのだ。紅城の中では異質なほど散らかり、生活感が溢れるこの部屋は、悠真にとって温かく感じ、同時に自分が紅城に似つかわしい田舎者なのだと感じた。そして、悠真とは別の意味でこの部屋にふさわしくない存在が悠真の目の前にいた。彼女から溢れ出るのは眩い赤色だ。鮮烈で、温かくて、鮮やかで、強く、儚い赤色。野江に攻められ、彼女は小さく笑った。

「ご自分の立場を分かっていらっしゃるのですか？」

官邸の扉を後ろ手で閉めた野江が彼女に言った。

「分かっているよ。私は強い。そうだろ」

自信溢れる口調は、第一印象の紅そのもので、紅は不敵な笑みを浮かべた。

「この火の国に、私以上の紅の石の使い手はいない。そうそう恐れるような事態にはならないさ」

紅はひらひらと手を振った。まるで、紅は自らに護衛がついていることを無駄なことのように態度で示していた。そんな紅に対して不快感をあらわにし、眉間に深くしわを刻んだのは都南だった。

「義藤はどうした？」

都南が彼女に言った。

「ああ、義藤は出来る奴だから、私の人形を護衛しているさ。私が出ているのを知っているのか、知らないのか……。まあ、どちらでも良いけどな。義藤は私が抜け出したことを知っていても追ってこない。あいつは知っているのさ。敵の大半は義藤がいるところに私がいると考えている。だから義藤は追ってこないのさ。この姿の私に義藤がついていると、私が紅だと知られるからな。それに、私は一人で行動しているようで、一人じゃない。私を守ろうとしているのは表のお前たちだけじゃない」

紅の言葉に、佐久が溜め息をついた。

「確かに、紅は火の国で一番の石の使い手だよ。そんな紅に護衛がつく時点で間違っているのかもしれない。でも、忘れないで。紅は護衛が必要な存在なんだ。体外的にも、本当の意味でもね。二年前のような事態に陥ったときに、微力な僕らの護衛はきつと役に立つはずだよ」

紅は小さく笑った。不敵で強い笑み。己の目下の存在だと、相手に知らしめるような笑みだ。悠真は今まで、紅以上に強い存在に出会ったことがなかった。それは、紅の石を使う力などではなく、紅は心が強いのだ。自らに対し大きな自信を持ち、自らを肯定している。迷う必要はない。自分を信じる。紅は自らに言い聞かせているようだった。

「その、羽織を渡すときに言っただろ。私は籠の中の鳥じゃない。私を閉じ込めておこうなんて、官府のようなことを言うな。私は赤を司る色神。赤は強く美しい色。私は、赤のように強くなければならぬ。私は赤のように、何者にも汚されない美しさを持たなくてはならない。誇り高く、強く、美しい赤を持たなくてはならないんだ」

その言葉があまりに強くて、悠真は一步後ろに下がった。正直なところ、紅が恐ろしかったのだ。紅は赤い着物を身に付けていないのに、全身に赤色を纏っているのだ。赤色がこれほど恐ろしいとは思

わなかった。

「義藤を呼びましょう。紅が仲間はずれにして怒るのなら、義藤だつてかわいそうよ」

野江が言った時、声が響いた。

「私も入れてもらおうかな。若い者たち」

声が響き、扉が開いた。そこには赤い羽織を羽織った男がいた。見た目は惣次と同じだが、惣次ではない。惣次のような親しみやすさが無く、厳格で、他者より少し上に立っている。それは、彼の年齢のせいであり、優れた術士たちを育ててきたせいであり、師としての威圧感のせいであつた。

「げ、遠爺」

あからさまに紅が身を引いた。紅は火の国で最も高貴な存在。赤が選んだ存在。紅の隣に立つ者は誰もいない、とても孤独な存在。紅の背負うものを、誰も分かち合うことは出来ない。強いけれど、少し華奢な紅がとても弱い存在に思えた。高貴なのに、内実は親しみやすい存在だ。歴代の紅を悠真は知らない。けれど、今、悠真の目の前にいる紅はそういう存在だ。高貴な存在であるはずの紅は、さまざまな表情を見せる。威厳高く強い存在。親しみやすく表情豊かな存在。

「どうした、紅。何か後ろめたさでもあるのか？」

紅に対して物怖じすることなく、遠次は足を進め、迷うことなく腰を下ろした。その横顔は惣次と同じだったが、堂々とした仕草は惣次とは異なつた。

「そんなのあるわけないだろ、遠爺。私に後ろめたいことなんて何もないさ」

紅は笑つて誤魔化し、手をひらひらと振り、足を投げさして座つていた。その姿は高貴さとかけ離れ、田舎者と同じ仕草だつた。

赤の茶会（3）

不思議なもので、紅がそこにいると言うだけで空気が変わる。埃臭い部屋の中に、高貴な空気が色濃く満たされていく。高貴な香りが満たされていく。赤が満たされていく。佐久が埃を払いながらお茶を淹れ、野江が窓を開いた。差し込む光は、紅だけを照らしているようだ。

「佐久、お菓子は何？」

まるで子供のように、落ち着きなく紅は部屋の中を歩き回り、勝手に物を引っ張り出していた。佐久も都南も、もちろん野江も何も言わなかった。紅という立場が許しているのか、彼女の人柄が許しているのか分からなかった。

「あった！」

紅は小さく笑い、棚の中を覗き込んだ。佐久は相当の甘党らしい。思い出せば、先ほども都南の甘味をつまんでいた。紅は悠真が見たこと無いほどの大量の甘味を佐久の部屋の棚から出した。

「やっぱり佐久はお菓子を隠し持っているんだな。えっと、栗饅頭に、葛餅に、醤油煎餅に、甘納豆に。あった、あった。あ、この甘納豆は栗を使っているんだな。珍しいな」

紅はとても嬉しそうに、楽しそうに甘味を出し、遠次だけが陰しい目で紅を見ていた。台の上に甘味を並べた紅から守るように、佐久が甘味を抱きしめた。

「紅、あんまり食べないでくれよ。最近、僕が甘味を食べ過ぎると言う人が多くてね、厨房でも甘味をくれないんだ。買出しに行く時間は無いし。紅が食べると、僕の分が減るでしょ。食べすぎは体に悪いとか言うけれど、頭を動かすには甘味が一番なんだから。紅は良いじゃないか。自分でもらってくれば良いでしょ」

悠真は佐久が甘味に固執する様子が可笑しかった。大人なのに、その仕草は子供と同じだ。

「いいじゃないか。お前は食べ過ぎだ」

紅が佐久から甘味を奪い取ろうと、台の上に身を乗り出した。わずかな拍子で佐久は腕を滑らせて姿勢を崩し、それを隣に座っていた都南が無言で支えた。都南と佐久は何とも言えない阿吽の呼吸で繋がれているようだった。都南に支えられながら身を乗り出した佐久は、焦り交じりの口調で紅に言った。

「駄目。僕から甘味を取ると、何も残らないよ。僕の身体は甘味で動いているんだからね。僕の動きが止まったらどうするの？」

佐久と紅が甘味を取り合っていた。二人の奪い合いを止めるように、一つ、野江が言った。

「二人とも、いい加減になさいな。紅も紅よ。佐久が甘味にこだわるのは知っているでしょう。いい加減になさい。紅、お座りなさい」

——それで、甘味を奪い合うのは止めて、そろそろ教えていただけませんか？何をなさりに足を運んだのですか？なにか、用事があったのでしょうか？」

ああ、と紅は言い、座布団に腰を下ろした。紅は台に肘をつき、片膝を立てて、そつと悠真を覗き込んだ。男勝りの姿も紅らしい。

「ああ、それはな。これを渡そうと思ったんだ」

悠真の前に差し出されたのは、長い紐の先についた紅の石。紅の細い手が紐を持ち、下で紅の石が揺れている。

「それは……」

都南が言った。微笑んだのは紅だ。

「そう、これは惣爺の石だ。それも、惣爺が隠居前に使っていたものだ。隠居してから渡した紅の石は、限度に達し色を失ったからな」

紅の石は、色濃く輝いていた。

悠真は惣次の名を聞いて、とても嬉しかった。確かに惣次はここで生きていた。誰の口からでもなく、紅の口からその言葉を聞くと安心できた。故郷を、とても素晴らしいと言った惣次が、ここで生きていたという証を見たような気がしたのだ。惣次は、謎に包まれた人だった。今まで惣次がどのようにして生きていたのか、どのよ

うにして泣いていたのか、悠真は知らない。祖父と酒を酌み交わす惣次の名が、紅の口から語られる。それだけで、惣次が存在したという何よりの証拠なのだ。ただ、なぜ紅が惣次の石を悠真に差し出したのか、その理由は皆目見当がつかなかった。

「どうしてそれを持ってきた？」

遠次が紅に尋ねた。紅は惣次の物だという紅の石を台の上に置いた。「惣爺は死んだ。これは惣爺のために加工したものだから、他の誰も使えない。——小猿は使えるだろ。義藤の石が使えたんだ。惣爺の石も使える。そうだろ？」

紅の笑みは、悠真の心を惹き付けた。不敵で美しい笑みだ。その紅が悠真に言うのだ。

「惣爺が隠居前に使っていた紅の石は強いぞ。その野江や佐久の持つ紅の石に匹敵する力を持っている。我が国最高の加工師、柴が加工した石であるしな。上手く使いこなせよ」

異論を許さないような口調で紅は悠真に言った。しかし、都南が勢いよく台を叩き身を乗り出すと鋭い剣幕で紅に詰め寄った。

「分かっているのか？石の力は脅威だ。未熟な小猿に、惣爺の石を渡すということは、みすみす暴走することを許すようなことだぞ。

刃を持つには、それなりの技量が必要だ。その刃が己や守るべき者を傷つけることだつてあるんだ。未熟な小猿に、優れた術士である惣爺の石は重すぎる」

息巻く都南を制すように、そつと遠次が手を差し出し、都南を止めた。そして、深い目で紅と悠真を見比べて言った。

「紅、どうしてそれを小猿に渡す？」

紅は苦笑し、台に置かれた惣次の紅の石を指ではじきながら答えた。「小猿に適した石を渡すということは、小猿を術士にするということだ。せつかく、選別を逃れたのに、術士にするのはかわいそうだ。生半可な石を渡せば、小猿の力が勝ってしまう。義藤の石を使ったときに、小猿の力は証明された。術士の力と石の力は釣り合わなくてはならず、弱すぎる石を持つことも、強すぎる石を持つこと

も許されない。この石がちょうど良いんだよ。どうせ、加工された石は私以外、誰も使えないんだしな。私は自分の石があるから、それ以上の石は必要ない。ならば、誰がこの惣爺の遺品を使うんだ？兄弟であっても、遠爺は使えない。このまま眠らせておく必要もない」

悠真は、小猿な上に子供で田舎者だ。紅は小猿「悠真」が術士にならないように配慮してくれている。自分に適した自分の石を授けられ、悠真は真正正銘の術士となる。苦悩と苦難と戦いと緋を負う術士となる。紅は、悠真に緋を負わせないために、惣次の石を差し出したのだ。それを受け取るのか、受け取らないのか、どうすれば良いのか悠真は分からない。村の人や惣次、そして祖父の死に対する復讐を果たすには力が必要だ。惣次の石があれば、悠真は力を手にすることが出来る。直接、己の石を手にしたわけでないから、術士のように紅の配下として縛られることも無いだろう。海で自由に泳ぐ魚のように、野山を駆ける獣のように、悠真は自由の身のまま力を手にすることが出来る。惣次の石に大きな魅力を感じたが、それは許されないことだと思った。赤い羽織を纏った人たちに、許されないような気がした。何よりも、都南から発せられる殺気に悠真は萎縮し、蛇に睨まれた蛙のようになっていたのだ。

「受け取りなさい」

言ったのは、野江だった。小さな音を立てて、都南が動いた。その手が刀の柄を持っていたことを、悠真は見逃さなかった。

——殺される。

悠真は直感した。都南は悠真が惣次の紅の石を受け取ることに反対をしているのだ。義藤が悠真に向けた殺気とは少し異なり、都南の方が義藤よりも荒々しい。

——殺される。

都南が朱塗りの刀に触れ、悠真は身を固めた。

赤の茶会（４）

――殺される

悠真は直感した。辺りを見渡すと野江も刀の柄を握り締めていた。悠真の存在と、紅の突飛な振る舞いが赤の仲間たちを混乱させ、混乱した彼らは、互いに刀に手を伸ばした。日ごろから戦いの中に身を置く彼らだからこそ、行動に迷いはなく、己の信念を貫くために命を懸けるのだ。

術士でなく、術士の選別で術士の才覚を見出されなかった田舎者の悠真。この紅城で悠真の目的を達成するには紅の石の力が必要だが、紅の石は強大な力を持つ剣であるからこそ、赤の仲間たちは悠真に紅の石を与えることに反対するのだ。野江が何のために刀に手を伸ばしたのか分らない。朱将を力で止めるには、陽緋の野江が動くしかないが、野江が悠真の味方である保障もないのだ。この場にいる実力者たちが、混乱しているのは事実で、悠真は混乱を抑える力である唯一の存在であるはずの紅に目を向けた。紅は苛烈な目で都南と野江を見ていた。どうやら紅は野江が刀に手を伸ばしたことに気づいているようだった。

「そんなことが許されると思っているのか？術士でもない小猿を信頼し、強大な力を与えるのか？」

都南の声はとても低い。その声は苛立ちを隠しきれていなかった。苛立ちは、悠真に紅の石を受け取るように言った野江に向けられていた。

「あたくしは見たわ。破壊された村を、死んだ惣爺を。復讐が許されるのなら、あたくしが手を下してやりたいくらいよ。術士でないなら、いずれ術士になれば良いということ。悠真には力が必要なの。生きるために、己の道を示すためにね。都南に言われずとも、あたくしは紅の石の力を知っているつもりよ」

野江の言葉も強い。悠真は身を縮めることしか出来なかった。無鉄

砲に走り出す隙さえなかった。彼らは戦いの才を持ち、平和な火の国の中で命を危険にさらしながら最前線で戦っている。野江も都南も強い力を持っている。その二人が苛立ちを露にしているのだ。

「二人とも、牙を抜きあうのなら、それなりの覚悟をしてもらおうか」

二人を制するように遠次が言った。彼は紅の石や朱塗りの刀に手を伸ばすことはしなかったが、発する言葉の一つ一つに深い威厳が含まれていた。遠次は彼らの中でそのような立場にいるのだ。赤い羽織を着た彼らを導く。守る。それが遠次。惣次もこのようにしていた。思うと、惣次がとても遠い存在に思えた。優れた人たちを一喝する。惣次もそのような立場にあったのだ。思い出せば、惣次は怒らせると、とても怖いと子供たちが噂していた。遠次は赤の仲間たちの父のような存在なのだろう。彼らに確かな道を示す存在なのだ。

そんな険悪な雰囲気の中、悪気なく、場の空気を読まないように紅が笑った。

「いい加減にしないか、野江も都南も。遠爺の言う通りだ。こんなところで、そんなくだらないことで刀を抜くな。二人が争ったところで、私の前では何の意味も成さないぞ。私はお前たちよりも強いからな。都南、おとなしく聞け。お前たちと同じように私も惣爺には返しきれないほどの恩がある。惣爺がいたから、私は紅として身を守るだけの強さを手にすることが出来たし、二人だって陽緋と朱将になれただろ。滅多なことは起こらない。惣爺の目と、私を信じないか？」

紅は続けた。

「お前たちの言いたいことは分かる。惣爺が認めた小猿を信頼するのと、石を渡すのとは違うということだろ。そんなこと、分かっている。それにな、惣爺の石は限界に近い。もう数回使えば、色を失い、力を失う。小猿が石を持って逃げたところで、何の悪さも出来ない。小猿の身に危険が近づいたときに、小猿を守る力をくれるぐらいさ。惣爺の石は私の時代の石だ。小猿が悪さをしたところで、

私は気づくことができる。いつ、どこで、どの程度の力が使われたのか、がな。小猿がどこにいるのか分かるのさ。だから、なにも案ずるな。私を信じろ」

紅が笑い、同時に紅から赤い色が零れ落ちた。人は皆、己の色を持つと言われている。悠真は赤の仲間たちを見比べた。皆、赤い色に近しい色を持っているが、それぞれに個性がある。その中で、紅の赤は最も鮮烈で、最も強く、最も美しい赤色だ。悠真の前に現れる「赤」と同じ赤色を持っているのは、紅が色神だからだろう。

官府は紅に、紅自身の石を差し出すように要求してきた。それは、紅の石の監視を止めること。悠真の目の前にいる紅が、色神となつてから十年が経ち、先代の紅が生み出した石は減ってきたはずだ。現に、赤の仲間たちの紅の石は、すべて悠真の目の前の紅が生み出した石だ。紅の石は強大な力を持つからこそ、悪用しないように監視が必要なのだ。悠真はそれを理解した。

赤の茶会（5）

紅は台の上に置き、指ではじいていた惣次の紅の石を掴むと、悠真の手をとった。紅の手は悠真の手より小さく、細い指が印象的だった。少し冷たい紅の手が、戸惑う悠真の手を開くとその中に惣次の石を押し込んだ。

「村が滅び、お前の家族や惣爺が死んだ責任は私にある。だからこそ、遠慮をするな」

紅が微笑み、悠真に惣次の石を握らせた。直後、微笑む紅の表情が翳り、彼女は深く頭を下げた。

「悪かった。本当に……。私が何かを誤らなければ、村は滅びなかったかもしれない」

紅のその声は震え、紅は肩を落とし片手を擦り切れた畳の上につき俯いている。悠真は紅がとても小さく見えた。先刻まで、悠真は紅を憎んでいた。その憎しみは深く、処刑されることさえ厭わず紅に飛び掛ろうとしたほどだ。紅が官府の要求を拒否したから、悠真の村は滅びたのだ。つまり、紅が悠真の祖父を殺し、紅が惣次を殺し、紅が悠真の故郷を破壊したのだ。だから悠真は心から紅を憎んでいた。なのに、紅がそんな言葉を口にするから、紅の声が震えていたから、悠真の中の紅を憎む気持ちは薄れていく。今、目の前にいる紅は、悠真が憎もうとしていた紅ではない。色神として君臨し、田舎者の命を塵のように扱う紅ではない。紅が村人の死を悼むようなことを言うから、悠真は混乱するのだ。紅は強い人のはずだ。第一印象の高圧的な言動も、年上であるはずの野江たちをあしらう様子も、自分の力に絶対の自信を持っている雰囲気も、全て紅が強い人だと表していた。なのに、今の紅からは強さを感じられない。村が滅びた責任を、その小さな体全てで受け止めて、今にも押しつぶされそうなのに、その弱さを誰にも悟られないように必死に隠し、強い紅を演じている。紅の持つ一色が、悠真の胸に鮮やかに彩った。

火の国で赤を統べる色神は、美しく、強く、そして小さな存在。誰もが色神を讃え、誰もが色神に奇跡を期待する。「色神」と呼ばれるから人々は色神を本物の神と勘違いしてしまうが、色神も人間色に選ばれ、色の石を生み出す器となっただけだから、奇跡など起こせるはずがない。紅の石をどのように使うのかは、術士や権力者たちに委ねられている。色神が出来るのは、抑止力として石の監視をすることだけなのだ。色神が奇跡を生み出すのでない。奇跡を生み出そうと色神である紅は戦い、紅を守ろうと赤の仲間たちが戦っているのだ。

「悠真君」

佐久が悠真を呼んだ。悠真が佐久を見ると、佐久の眼鏡の奥の目が、とても強く輝いて見えた。それまでの、悠真の中の佐久の印象は優しく知的な人というものだった。穏やかで、刀とは縁遠い。しかし、その考えを改める必要があった。もしかしたら、彼らの中で怒らす一番怖いのは佐久かもしれない。そう思ったほどだ。肩を落とした紅を見て、再び佐久に目を向けると、穏やかな口調とは裏腹な目をした佐久がまっすぐに悠真を見つめて言った。

「もし、紅に牙を向けたのなら、僕は君を殺すよ。君がどんな理由でここに来て、どんな決意があるかなんて関係ない。僕らにとって、紅に勝るものなんて無いのだからね。忘れないで。僕は君を守るつもりであるけれども、それは君が紅を傷つけない前提だよ。きつと野江も都南も義藤も同じだよ。忘れちゃいけない。僕たちは君の味方なんじゃない。紅の仲間なんだ」

その言葉が嘘でないことくらい、悠真でも分かっていた。野江も都南も否定しない。遠次も何も言わない。穏やかで、優しく、悠真を敵視しない彼らにとって、悠真より紅の方が大切な存在だから悠真が紅に牙を向けた瞬間、悠真は殺される。赤の仲間は悠真よりも遥かに強い力を持ち、紅を守るために悠真の命を奪うことに躊躇いはない。赤い羽織は嘘をつかないのだから。

野江が悠真の首に、引退前に惣次が使っていたとされる紅の石を

かけてくれた。その石がとても重く、重みの分だけ、紅の存在が儚い存在のように思えた。紅の石は火の国を守り、火の国を豊かにし、火の国の民の生活を支え、他国が火の国に進入してくることを防いでいるのだ。この石があるから、悠真たち火の国の民は生きていける。この強い力を持つ恐ろしい石があるから、生きていけるし、争いも生じるのだ。

「覚えておきなさい。紅の石を持つということの重みを」

野江の言葉はとても深みがあった。この石は惣次の石だから悠真は術士でない。けれども、悠真は憧れていた術士に一步近づいた。一步近づいたのに、嬉しい気分にはならなかった。昨日までの悠真だったら喜んでいたのに、術士の苦悩を知り、紅の姿を見たから悠真は素直に喜べないのだ。色神になったために紅が背負った苦難を、紅を守るために戦い続ける赤の仲間たちの苦難を、悠真は知ってしまったから。

——小猿は我が色をどのように使うつもりじゃ？

赤の声が悠真の脳裏に響いた。

——人殺しに使うも、大切な者を守るために使うも、生活を豊かにするために使うも、全ては術士に委ねられる。我が赤色は、他色と異なり使い方が自由じゃ。小猿は我が色をどのように使うつもりじゃ？

赤が楽しむように悠真に語りかけていた。赤の言葉も、悠真への警告の言葉だった。赤の力「紅の石」をどのように使うかは、悠真に委ねられている。悠真は、どのように強大な力を使えば良いか分からなかった。同時に、どのようにすれば紅の石が持つ赤色の力を引き出すことが出来るのか、それさえ分からないのだ。それは術士と呼ばれる存在などではない。

赤の決意（１）

「こんなに、楽しい茶会に義藤がいないのは可愛そうね」

紅が悠真に惣次が使っていた紅の石を渡すという、突飛な行動をとるから、茶会は静まりかえっていた。悠真も首からかけられた紅の石の重みを感じ、赤の仲間たちの強さに押されて完全に萎縮していたのだ。その空気を打開するように、野江が微笑んだ。

「そうだね、義藤も呼んであげなきゃ。義藤は僕らの仲間だからね」
佐久が甘味をつまみながら言った。

「義藤の奴、一人残されていることを知らないのかもしれないな」
都南が渋く言い、遠次が続けた。

「紅に振り回されて、義藤も苦勞が絶えぬ。呼んでやれ」

誰もが義藤に期待をかけ、義藤を大切にしているようだった。努力を惜しまぬ天才。と赤の仲間たちが義藤を認めていたのは、先刻のことだ。もちろん、悠真は義藤のことがあまり好きではない。あの抜き身の刃のような顔立ちと表情が嫌いだった。

数刻後、義藤が荒々しく引き戸を開いて入ってきた。義藤を呼ぶと言い、使用人を走らせたすぐ後のことだった。義藤の首には数刻前に悠真が暴走させた紅の石がかけられている。悠真は、紅の石がどれだけの力を持ち、どのような可能性を秘めているのか分からない。しかし、赤は紅の石の使い方は術士に委ねられていると言った。紅の石は使い方次第で、武器にも役立つ道具にもなるのだ。手にした色をどのように使うのか決めるのは。人間なのだ。

「ああ、義藤。ようこそ」

まるで自分の部屋のようにくつろいでいる紅に、先の儚さは見えなかった。悠真はどれが紅の本当の姿なのか分からなかった。高圧的で高飛車な雰囲気、弱く儚い雰囲気、気さくで強い雰囲気、紅が全てを演じ分けているのなら、紅は火の国一番の役者だ。日ごろから演じることが必要な立場であるのなら、紅はとても辛い境遇にある

と言える。本当の紅は、どれなのか。紅に心が休まる時はあるのか、悠真はそれが気になっていた。それだけ、悠真の中に「紅」という存在が大きく居座っているのだ。憎む相手でない。尊敬する相手でもない。紅は、人の心を惹きつける魅力があるのだ。

「やはり、小猿の相手をしていたんだな」

義藤は開口一番にそう言った。

「相変わらず振り回されているな、愚痴ならいくらでも聞くぞ」

都南が気安く片手を挙げて義藤を出迎えた。部屋の主である佐久も微笑んだ。

「ようこそ、義藤。遠慮しないで入りなよ」

佐久が手招きをし、義藤は廊下に膝を折った。

「失礼します」

義藤が流れるような所作で部屋に入り座った。やはり、義藤の動作は品良く、紅が嬉しそうに義藤を出迎えた。赤い羽織も、朱塗りの刀も、義藤の力を証明している。

「渡したのか？」

義藤が紅に問うた。その一言で、悠真は義藤が言った言葉の意味が分かった。義藤の目は、悠真の首にかけられた紅の石に向けられている。この紅の石をめぐって、野江と都南が刀を握ったのは、先ほどのことだ。

「その話なら、俺たちの間で済んだ。かき乱すな」

都南が言った。悠真も義藤が激昂することを覚悟した。悠真の印象では、義藤とはそういう人のはずだ。しかし、義藤は小さく苦笑した。

「俺は反対なんてしませんよ。紅が言うのなら」

悠真は義藤が、紅の石を小猿に渡すということを認めたことが信じられなかった。義藤が紅を信頼していることは明らかだが、紅の行動全てを受け入れるはずも無い。義藤は紅の身に危険が生じること避けるはず。ならば義藤は、彼自身の意志で悠真を認めたと考えられる。都南は紅の安全のために反対をした。野江は滅びた村を見

たから悠真に力を与えようとした。ならば、義藤は何を思つて紅の石を悠真に渡すことを認めたというのだ。そう思うと、義藤がとも図りがたい存在に思えた。そんな義藤は背筋を伸ばし、悠真を見た。目は強く美しい。もしかしたら、義藤は良い奴かもしれない。悠真がそう思つてしまうほどだ。

「——小猿は俺の石を使った。それでいて平気な顔をしている。と言うことは、小猿の力は大緋に匹敵するということ。その上、力を制御できず、ただ暴走させているだけ。暴走させる上に他人の石を使えるとなると、想像以上に危険な存在だ。官府に渡れば、利用されかねない。ならば、ここにいてもらつたほうが小猿も安全で、官府に利用されないように俺たちが守ることが出来る。小猿自身が身を守るために紅の石を手にするのも当然のこと。術士でない小猿に紅の石を渡すことの全ての危険要素は、小猿が紅城にすることで排除できる。ここなら、この目で小猿を見張ることが出来て、何かあればすぐに止めることが出来る。小猿の力が暴走してめつたなことが起きたりしない。俺も、二度も負けたりしませんよ。負けても、野江や都南、佐久が何とかしてくれるでしょう」

はつきりした。悠真は義藤から信頼されていない。義藤は悠真を危険な存在として見ているのだ。悠真は、やはり義藤はいけ好かない奴だと、思った。悠真は危険な奴だから監視しやすいようにここに残る事を許され、危険な奴だから官府の手に渡らないように守られている。そういうことだ。

「義藤も言うね。本当に、数年後はどちらかが立場を奪われているかもしれないよ。何せ、都南はそこまで考えられないし、野江だって同情で認めたようなものだからね」

佐久が拍手をし、野江と都南が悔しそうに目を背けた。悠真は赤の仲間たちが義藤の力を信頼していることが分かった。義藤は、歴代最強の陽緋と、優れた朱将に認められている。彼らの立場を取って代わるほどの天才。義藤は野江、佐久、そして都南を見渡し言った。「まだ、引退なんてしないでくださいよ。俺は、生涯朱護でありた

いんですから。まだまだ、頑張ってください」

抜き身の刀のような義藤が、丁寧な言葉を口にしたことに悠真は戸惑った。やはり、義藤は良い奴かもしれない。無骨な言葉も、抜き身の刀のような行動も、全て紅を守るため。野江は言っていた。義藤は紅が色神になり紅となる前からの知り合いだと。もし、彼女が紅となったから、紅を守るために強くなったのなら、義藤は強い心を持っている。全ては、大切な人を守るため。やはり義藤は良い奴だという結論に至った。悠真は必死に義藤の品定めをしていた。野江たち優れた術士が認める存在が、どのような人なのか気になったのだ。

赤の決意（２）

悠真は義藤の品定めをしながら、赤の仲間たちに目を向けた。赤の仲間たちを見れば見るほど、紅は素晴らしい人たちに囲まれていると思うのだ。彼らは紅の仲間なのだ。突然、そうだな、と口にしたのは佐久だった。

「悠真君、ここに泊めると言っただけで、やっぱり義藤のところに泊めてもらうといいよ。年も僕たちよりは義藤に近いし、気を使わないで済むでしょ。僕ね、こう見えても人を見る目はあるつもりなんだ。義藤と悠真君。きつと仲良くなれると思うんだ」

悠真は言葉を失った。正直なところ、悠真は義藤が苦手だ。悠真の必死の品定めの結果、義藤が良い奴だとしても、義藤の行動は紅を思うが故とはいえ、義藤はあまりに怖かった。白刃が目の前に迫った恐怖を簡単に忘れることは出来ない。ならば、佐久と一緒にいたほうが安心できた。野江が獅子なら都南は虎、義藤は狼といったところだ。佐久だけが普通だ。安全なのは佐久と一緒にいることなのだ。

「無茶言うのは止めてください。俺は今日、泊りなんで」

佐久の突然の申し出に、あからさまに義藤が拒否をし、もちろん、悠真も同感なので胸をなでおろした。良い奴だとしても、義藤の第一印象は最悪だった。義藤の家に泊まるのなら、床下で寝たほうがましだ。恐ろしい人の近くで休めるはずがない。小さく笑ったのは紅だった。

「分かった、今日、義藤は泊まりだ。佐久と都南、野江も一緒だ。小猿も来ればいい」

紅は誰もが反対することを容易く口にするから、空気を赤く染めていく。そんな無茶苦茶な、と佐久は言ったが、紅の決定を覆すことなど出来ない。

「嫌な予感がするんだ。官府が動き始める、そんな予感。犯人は、

惣爺を殺しても、私が動かないことを知り、次はどんな手で出てくるのか分らない。過ぎた警戒ならそれでいい。私の命が奪われるくらいならそれでもいい。下手をしたら、私をはじめ、お前たちも殺されるぞ。石の警告はあたる。私が殺され、お前たちも殺されるようなことがあれば、次の紅を誰が守る？紅が死んでも次の紅が現れ、紅に代わりはいるが、紅に忠義を尽くす優秀な術士や将軍、技術者に代わりはいないのだからな」

紅は、紅の石を取り出した。赤の仲間は紅を守ろうとし、紅は赤の仲間を失わないようにしている。その関係は悠真には理解しがたい。「これは、私の石だ。私が色神紅となり、最初に生み出した石。私以外に使用することが出来ず、決して色を失わない石。全ての石がどこで使用されたのか分かる。この石を官府に渡すことは出来ない。この石が警告している。だから、今日は危険なんだ。こうやって、私が小猿を気にかける理由、分かるだろ」

紅は立ち上がった。

「赤影も動かすのか？」

義藤が言った。「赤影」が何を指すのか悠真には分からない。ただ、赤影が強い存在であることは、会話の流れから理解できた。

「必要があればな」

紅の強い言葉に、義藤は苦笑した。

「紅は、紅の代わりは現れると言うが、俺はそうは思わない。俺は、お前じゃなきゃ共に戦うことはしない。忘れるなよ。紅は色神の前に、一人の存在なんだ。きっと、赤丸も同じさ。お前が紅だから、命を賭して守るんだ」

義藤はまっすぐに紅を見つめていた。赤の仲間たちは言っていた。義藤は彼女が紅となる前から面識があると。義藤は色神紅を守ろうとしているのではなく、彼女を守ろうとしているのだ。義藤はゆっくりと続けた。

「それほど紅が危機を感じているのなら、紅は野江のところに身を寄せるといい。赤と都南、佐久に護衛を任せて。俺は、紅の人形で

も守っているから。その方が、官府の目も誤魔化しやすいし、官府も俺が紅から離れるとは思わないから、俺のところに官府をひきつけられる。何か事態が生じれば、紅は逃げやすくなる」

悠真は義藤の言葉に戸惑った。義藤は誰よりも紅の近くにいることを望むと思ったのだ。なのに、義藤の申し出は、彼が一人で危険な場所で囷になることを望んでいる。紅の警告は義藤が本気になるほど当たるから、義藤は自ら囷になると言ったのだ。確かに、紅の直属の護衛である朱護の義藤が、あの紅の部屋に残れば、敵は紅がそこにいると思うだろう。守るために、危険な状況に平然と足を踏み入れる。義藤には命を賭しても紅を守るという強い決意があるのだと、悠真は感じた。

赤の決意（3）

紅はいくつもの表情を見せる。その中で共通しているのは己の力に自信を持っているということだ。そもそも、色神として生きる以上、自分に自信がないといけないのかもしれない。自分に自信のある紅が警戒し、仲間と一緒にいることを指示したことは、紅が強い危機を感じているということ。紅が危険を感じているから、義藤は困になると申し出た。命がけで紅を守ろうとする義藤に野江が言った。

「確かに名案かもしれないけれど、下手をすると義藤……あなた死ぬわよ」

野江の言葉は遠慮がない。何かを包み隠すようなこともない。

「そう簡単には負けません」

義藤に迷いは無い。すると都南が楽しそうに言った。

「まさか、義藤が自分から紅と距離を置くようなことを言うなんてね。義藤が紅の隣を離れて、どうするんだ？お前が紅を守るんだろ」

「赤丸が動くなら紅の護衛は問題ありません。彼は、俺以上に強いから」

義藤も頑固だ。佐久が身を乗り出して言った。

「まるで、赤丸を知っているようだね。確かに、赤丸は強い存在であるけれど、赤影の正体や赤丸の正体を知っているのは紅だけでしょ。紅も絶対に話したりしない。赤影や赤丸は裏の存在だからね」
義藤は何も言い返さなかった。「赤影」や「赤丸」が何を指すのか分からないが、紅を守る存在であること、そして誰も正体を知らないことは分かった。紅がけけらけらと笑った。

「赤丸のことを探るな。赤丸は、野江とも都南とも、もちろん佐久や義藤とも異なる存在だ。表の世界のお前たちが、裏の世界の赤丸を知る必要はない。——義藤、私の警告は当たるぞ。止めておけ。今回の敵は、村一つを壊滅に追い込み、外部から野江の侵入を阻む

ことが出来るほどの力を持つ。下手をすると、本当に死ぬぞ」

紅は笑っているのに、その言葉に冗談は無く、返した義藤の言葉も冗談を含まない。

「だからだ。大きな敵ならば、紅を守りきれないかもしれない。歴代の紅のうち、何人が暗殺された？ 運が良かっただけでは生き残れない。二年前だって、下手をしたら紅も死んでいたかもしれないんだ。紅、赤丸を動かすほど警戒しているんだろ。逃げているだけじゃ、何も始まらない。惣爺もそう言ったんじゃないのか？ 惣爺を殺して、村を一つ滅ぼした奴を野放しには出来ない。もっと大きな被害が出る前に阻止しなければならぬ。どんな危険があっても、どんな犠牲を払っても。その犠牲が俺であっても、紅は犯人を捕らえて罪を明らかにしなきゃいけない。本当は、分かっているんだろ」

しばらく沈黙が続いた。義藤の思いがけない言葉に、誰も何も言えない。もちろん、義藤を苦手としている悠真であっても、義藤の言葉は受け入れがたい。目の前にいる人物が、死ぬかもしれないということを容易く受け入れることなど出来ない。罔になって確実に死ぬわけじゃない。そう分かっているとしても、この場の雰囲気がそう告げていた。歴代最強の陽緋野江。朱将として朱軍を率いる都南。陽緋に匹敵する力を持つ佐久。そして、次の陽緋とも朱将とも呼ばれる義藤。彼らが揃っても、面と向かって敵と戦い勝つことは出来ない。田舎者の悠真には分からない政治的戦略や、工作があるのだろう。

「紅、それしかないよ」

佐久が一番に口を開いた。佐久は義藤の申し出を、紅に受け入れるように言ったのだ。そしてゆっくりと佐久は続けた。

「紅、聴くんだ。もし、今日を乗り越えたとするよ。それでどうなる？ 僕たちはいつまでも敵の尻尾をつかめないんだ。次は、どんな犠牲が出る？ どんなことをされる？——確かに危険だよ。義藤一人では手が足りないかもしれないし、下手をすれば義藤が命を落とすかもしれない。それでも、これしかない」

誰も否定しない。紅たちは敵の正体を知らない。誰も知らない。悠

真は一体何をするために紅城に来たのだ？悠真は、祖父を、惣次を、村の人たちを殺した人に復讐をするために紅城までやってきた。田舎者と避難されても、小猿と馬鹿にされても、紅を憎むことになっても、悠真の信念は揺るがない。義藤は一人で敵と会う。それは千載一遇の好機。無力で何の伝手もない悠真が、強大な敵の正体を知る好機。悠真の復讐の相手が紅でないならば、本当の敵の正体を悠真は知らなくてはならない。

赤の決意（４）

義藤は紅を守ることを決意し、悠真は復讐を決意した。義藤が囃となり敵と接触するのなら、悠真が敵と接触する好機はその時にある。悠真が己の決意を口にする時を探っていると、ずっと黙っていた遠次が口を開いた。

「紅を守るために一人で囃になり、死すことも厭わずとは……。義藤、お前の願いは、赤丸を再び表舞台へ引き出すことか？」

遠次の言葉に野江たちが不審な表情を見せた。そして、義藤は言った。

「俺は行きます。赤丸が動くのなら、赤丸が身を呈してでも、必ず紅を守る。赤丸を表舞台に引き出せるかどうかは、俺には分かりません。それは俺じゃなくて、紅や赤丸自身が決めることでしょう」

遠次は小さく笑った。

「お前は時々わしの想像を超える行動をする。十年前の子供とは別人だな。——弟の義藤は強いが優しい。お前の父が言っていたのを出す。とても嬉しそうに、誇らしそうに、お前の父は話していた。お前の父はお前に会ったことが無かったが、母が伝えていたのだろ。お前の母は、死すときまで子供の成長を願っていたに違いない。二人の息子は母が願い名づけた通り、紅に忠義を尽くす。行け、義藤。紅を守るのはお前の仕事だ。必ずや、お前の両親が紅と義藤を守ってくれる」

遠次が義藤の後押しをしていた。

「遠爺と義藤が俺たちに隠し事とは。遠爺は、赤丸の正体と義藤の両親を知っているのか？」

都南が言った。

「他人の過去をあさるものじゃない。お前だって、触れられたくない過去があるだろ」

遠次がぴしゃりと言い、その言葉に萎縮して、それ以上は誰も何も

言わなかった。

「分かったよ、遠爺。それ以上は何も言わない。俺は義藤が行くことに賛成だ。義藤じゃなくて、俺が囀になりたいが……義藤でなければ意味が無いだろうな。紅、それしかない」

都南が言った。佐久と都南が義藤の申し出を肯定した。紅を守るためだけじゃない。正体を見せない敵の正体を知るために必要なのだ。そして、悠真にとっても必要なことだ。

「分かった。危険を恐れていては、何も手にすることは出来ない。

義藤、死ぬなよ」

紅が義藤の顔を覗き込んで言った。それに対して、否定したのは野江だった。

「お待ちなさい。みすみす義藤を死なせるおつもり？義藤は必要の人よ。簡単に命を落としてはいけないわ」

野江が強く怒りで震える声で否定した。

「安心してください。俺は死にません。たとえ死んでも、もう一人の俺が現れますから」

義藤が野江に告げた言葉の意味が悠真は分からなかった。もちろん、他の人たちも同じだ。ただ一人、紅だけが不快感を露にしていた。遠次も何かを知っているらしい。それでも、無表情を演じることが出来るのは、年の功だ。悠真は自分の意志を告げる機会を探った。義藤が囀になって、官府の敵の正体を探る。それは、悠真の望んだことだ。

「ならば、私は誰かのところに泊めてもらうとするか」

紅が不満げに言った。

「俺も」

悠真は言った。義藤と一緒にいき、復讐の機会を探りたかった。好機を逃す理由はない。

「そうだな、義藤のところに泊めてもらえないから、やっぱり佐久のところ泊めてもらうといい。都南より佐久の方が気安いだろ」
紅が言った。それは、悠真の望むこととは違う。

「違う。俺は、義藤と一緒に行く。俺は、村を滅ぼした敵の正体を探って復讐するために紅城まで来たんだ。引き下がれない」

紅が苦笑した。

「言っただろ。義藤でさえ危険なんだ。小猿が行ってどうする？」

「分かっているさ、そんなこと。それでも、俺は紅城まで来たんだ」
悠真は何を言われても考えを変えるつもりは無かった。そのためにここまで来た。そのために、生き延びたのだ。

「せっかく生き延びたんだ。なのにこんなところで死ぬつもりか？」
紅の言うことは最もで、悠真は自分の命の重み知らない愚か者だ。無鉄砲。他者に迷惑をかける。それでも、諦めきれない。ここで諦めては、自分が何のために生き延びたのか、なぜ生きているのか分からなくなるのだ。

赤の決意（5）

悠真は復讐の相手を探り、復讐をするために義藤と一緒に行かなければならない。悠真は諦めることは出来ない。選別で落ちた自分が紅の石を使える。村の復讐をすることが生き延びた理由のように思えるのだ。

「ここで諦めたら、俺は生きる意味を失ってしまう」

それが本心だった。危険でも足を踏み入れなければならない。

「小猿は愚かな上に馬鹿者だな。話を聞いていなかったのか？実力者義藤一人でも危険だというのに、小猿が行ってどうするって言うんだ？」

紅は悠真を止めようとしたが、悠真に止まるつもりは無かった。それは紅に飛び掛ったときと同じだ。このまま生きていても、悠真は何も感ずることが出来ないのだ。村が滅びて、祖父と惣次が殺された復讐をすることもなく、笑うことなんて出来ないのだ。

「俺は下がれない。俺は、戦わなくちゃいけないんだ」

悠真は再び反対されることを覚悟した。しかし、何を思ったのか紅は一つ息を吐きゆつくりと言った。

「義藤、小猿の守を頼めるか？」

義藤は小さく笑った。

「断ったところで、どうにもならないだろ。紅が小猿を守るというのなら、俺は必ず小猿を守る」

諦めたような義藤の言葉が印象的だった。

「そんな無茶苦茶な」

野江が言ったが、悠真を止めることが出来ないことを感じたのかそれ以上は言わなかった。同じように紅を大切に思う都南が言った。

「小猿のことは義藤に任せよう。俺たちだって、黙って隠れているわけにはいかない。敵が襲撃するとすれば、義藤のいる紅城の最上階だろう。万一、勘良く紅の本当の居所を知れたのために、紅

は野江と一緒にいる。もちろん、赤丸を動かすのを忘れないでくれよ。義藤の言葉を借りるわけじゃないが、赤丸がいる限りよほどのことは生じないだろう。赤丸は、俺たちを超える実力者に違いないからな。俺と佐久と、野江と紅は三つに分かれて紅城を囲む。それで良いな」

野江が続けた。

「敵はきつと、闇に紛れて来るはず。義藤、あたくしたちが、あなたを援護するわ。あなたを死なせたりしないわ」

野江が静かに笑い、悠真に目を向けた。

「悠真、あなたは強くおなりなさい。大切な者を守るには、それなりの力と覚悟が必要なのよ」

野江の言葉に嬉しそうに笑ったのは紅だった。

「野江、都南、佐久、そして義藤。私の自慢の仲間たちだ。小猿も羨ましく感じるだろう。小猿が本意を成し遂げ、それでも、紅城で生きることを選ぶのなら、小猿に合わせた石を渡そう。私の自慢の仲間の下で学ぶことを認めよう。それまで、小猿は術士にならず、逃げ道を残しておけ。どんなに過酷な現実を知っても、この城で生きることを選ぶまでな」

紅の言葉に赤い羽織を着た面々は深く頭を下げた。年齢も関係ない。強さも関係ない。紅は誰よりも上に立つ強さを持つ。悠真も彼らの中に加わりたいと思った。それは、彼らの強い一体感に憧れた。彼らは何があっても紅を中心にまとまっていく。どんな困難も紅がいれば乗り越えられる。決して孤独にはならない。家族を失い、故郷を失った悠真にとって、その一体感は憧れであった。復讐を果たすと息巻く自分は、復讐がなければ孤独に押しつぶされてしまう。誰も悠真のことを知らない。誰も悠真の心配をしない。悠真が他人を思うこともない。復讐が無ければ、悠真がいるのは孤独の海。ふと疑問に思ふのだ。本意を遂げたところで、悠真はどうなるのだろうか。孤独から逃れるために、悠真は彼らに加わりたいと願うのだ。加わりたいと願うと同時に、惣次や野江、そして紅の言葉を思い出

すのだ。

——普通の生活をしてえ、そう思うのが普通じゃ。もしかしたら、紅もそげえ思っとるかもしれんの

——よくよく考えなさい。紅城へ足を運ぶということは、術士になるということ。今までのような生活は送れないわ。

——それまで、逃げ道を残しておけ。どんなに過酷な現実を知っても、この城で生きることを選ぶまでな。

彼らは幾度と無く悠真に忠告した。術士になることを望んではない。術士になっても、待っているのは過酷な現実。それでも悠真は言った。

「俺は、強くなりたい。強くなって復讐するために」

すると、紅が悠真の前に刀を差し出した。それは、普通の黒塗りの刀。

「もって行け。むやみやたらに石を使うな。力を守ると同時に他者も傷つける。未熟な小猿はなおさらだ。小猿は今、義藤に身を委ねた。義藤に習え。義藤は強いぞ」

今の悠真に躊躇いは無い。迷うことなく刀を受け取った。目の前に敵が迫っている。村の人たちが命を落としてから、一日も経っていない。忘れることが出来ない。呆然とすることも出来ない。悠真を駆り立てているのは、強い憎しみと復讐心だけだから。

赤のからくり師（１）

義藤の決意と悠真の決意に茶会は不思議な局面をきたしていた。緊張からか悠真はお茶をたくさん飲み、気づけば湯のみは空になっていた。それに気を使った佐久がお茶を入れようと立ち上がり、当然のように足をとられて転倒しそうになるから、当然のように都南が支えていた。

「お茶なら、俺が淹れますよ。危ないので、座っていてください」
義藤が流れるような所作で湯を沸かすからくりの手を伸ばし紅の石をからくり仕込んだ。悠真は気遣いをする義藤がどこか気に入らなかった。義藤が気遣いをするとうあつても、彼が良い奴だという結論に達してしまうからだ。術士である義藤は当然のように紅の石の力を活用し、からくり師が作り出したからくりで湯を沸かそうとする。悠真が紅の石で湯を沸かす瞬間を見ようと目を細めたとき、
「おや」と義藤は手を止めた。

「からくりの調子が悪いんじゃないですか？」

義藤はからくり仕込んだ紅の石をはずした。

「このからくり、使わない方がいい。以前、鶴蔵に言われたことがあります。からくりは生き物と同じだと。無理をさせない方がいいです。からくりは、鶴蔵にとって子供なのだから。俺は鶴蔵に叱られたくありませんからね。このからくりは使わない方がいいですよ」
義藤は労わるように、からくりに触れていた。困ったように佐久は頭を抱えた。

「分かっているんだけど、どうも忙しくてね。僕が使うとどうしても落としたり、蹴ってしまったり、踏みつけたり、僕にそのつもりが無くて荒い使い方になっちゃうからね」

「けらけらと笑ったのは紅だった。」

「佐久が壊してしまうことは、鶴蔵も承知済みさ。ちょうどいいじゃないか。鶴蔵も呼ぶといい」

言つと紅は懷から小さなからくりを出した。それは車輪のついた小さな車だった。

「おや、珍しいからくりだな。鶴蔵の新作か？」

都南が興味ありげに身を乗り出した。

「先日、鶴蔵がくれたんだ。紅の石の力で動き、迷うことなく鶴蔵のところまでたどり着く。鶴蔵のところまで行くと、使用した術士の所まで戻るらしい。——鶴蔵がくれたときにな、体を動かすのが苦手な佐久に渡す、と言っておいたのさ。佐久は鶴蔵のところまで行く段階で怪我をしてしまうからな。佐久、お前が使える。私が使うよりお前が使ったほうが鶴蔵の反応が面白いはずだ」

紅が笑いながら、小さなからくりを佐久に渡した。

「紅、鶴蔵をからかうのは程々にしておけ」

遠次が紅に苦言をしていたが、紅は一向に気にせず笑っていた。

「いつも私から逃げる鶴蔵への仕置きさ」

紅が笑いながら、からくりを佐久に手渡した。

「仕方ないね。紅が言うなら、僕が使うよ。鶴蔵は僕が持っているって思っているんですよ。いやあ、鶴蔵が便利だからくりを作ってくれるから、助かるなあ」

佐久がからくりに自分の紅の石を仕込み、仕込まれた紅の石は赤い光を放った。紅が膝を立てて、嬉しそうに笑った。

「佐久、少しは体を動かせ。からくりは、お前が怪我をしないための補佐でしかないんだぞ。しっかりしろ。私はお前にじつとしておけなんて、一言も言っていない。体を鈍らせるな。安全な範囲で動け、と私は言っているはずだ。鶴蔵がお前のために作ったからくりだってあるんだからな」

困ったように佐久は俯き、紅はけらけらと笑っていた。

「分かっているんだよ、紅。僕だって動かなきゃいけないことぐらいね」

体を動かすことが極端に苦手な佐久が苦笑していた。

佐久が紅の石を仕込み使用したからくりは動き始め、佐久は紅の

石を取り外した。紅の石をはずされても動き続けるのだから、このからくりの制度の高さが証明されている。からくりは車輪を回転させ、障子の隙間から外へと出て行った。

それからしばらく経ってからのことだった。

「佐久はん、入ります」

障子が開き、外には前髪の長い男が頭を下げていた。ぼさぼさの髪に、よれた着物。張り詰めた空気を和ますような場違いな男。着物の形は甚平と近い。長い前髪で目は見えない。汚れた赤い前掛け。彼も紅に近しい存在のようであった。鶴蔵を呼んでいるのだから、目の前の男がからくり師鶴蔵のはずだ。

「待っていたよ、鶴蔵」

佐久が身を乗り出した。ぼさぼさの髪の男が顔を上げ、悠真たちを見渡した。長い前髪に隠れて目は見えないが、小さな生き物のような仕草が怯えた印象を与えた。そして、体を縮めて慌てて障子を閉めた。

「す、すみません。あつし、出直しますんで」

人に会うことに照れているような雰囲気。現在、優れたからくり師がいることを悠真は知っている。野江が使う空挺丸を作り出し、紅の石から独立して動き、目的地まで辿り着くからくりを作り出した。紅の石は力であるが、使用方法は術士に委ねられている。術士が使用すると大半は戦いに利用されかねない。紅の石を動力として動くからくりがあるから、紅の石の使用幅は広まるのだ。これが、稀代のからくり師なのだと、悠真は小動物のようなからくり師「鶴蔵」を見た。

赤のからくり師（２）

小動物のように隠れてしまった稀代のからくり師を連れ出そうと、佐久が腰を浮かせた。

「ちょ、ちよつと……」

佐久が立ち上がり、大股で歩き、悠真の前を横切り、義藤と遠次の間を通り障子を開いた。

「鶴蔵、待つて」

佐久が障子を開くと、そこには散らばった荷物を慌てて道具箱に入れている男がいた。ぼさぼさの髪に、櫛を通したのはいつが最後ののだろうか。田舎者で汚い悠真は、どこか親近感を覚えた。

「すみません、改めて来ますんで」

鶴蔵と呼ばれた男は、慌てて荷物をまとめていたが上手くいかず、慌てれば慌てるほど、手から道具が滑り落ちていく。使い込まれた道具が外廊下に散らばり、彼は道具を汚れた風呂敷に入れようとしていた。

「鶴蔵、お前のことも紹介するから入れ」

膝を立てて座った紅が言い手招きをしたが、鶴蔵は深く頭を下げて信じられない速さで首を横に振っていた。

「あつしには、紅様と同席する資格がありませんので」

極度の緊張家なのか、照れ屋なのか、悠真には分からない。鶴蔵はぼさぼさの頭をぐしゃぐしゃにし、掻いた頭からは埃が落ちた。

「鶴蔵、また私を紅様と呼んだな。赤い前掛けを渡すときに言っただろ。お前は私の信頼できる仲間の一人だと。いい加減、赤を持つ覚悟を持て。紅を支えるのは術士だけでないんだぞ。学者がいて、師がいて、加工師がいて、お前のようなからくり師がいる。だから私は紅として立っていける。誰が欠けることもならないんだ。周囲に恵まれているのが、私の幸運だ」

紅は子供のように頬を含ませて、頬杖をつき、鶴蔵は怯えたよう

に身体を縮めた。

「紅も鶴蔵を怖がらせないでよ。気にしないでいいよ。からくりの調子を見て欲しいんだ。ほら、鶴蔵、入りなよ」

佐久は鶴蔵の腕を掴み立たせようとしたが、それでも佐久らしく足を滑らせた。佐久に手を貸したのは、入り口の隣にいた義藤だ。

「気をつけてください」

支えた義藤が一言、佐久に言った。

「ごめん、ごめん。義藤。助かったよ」

佐久は照れたように歪んだ眼鏡を直した。佐久は再び鶴蔵を中へ引き込もうと試みていた。

「ほら、鶴蔵。入って」

「あつしは遠慮させていただきやす」

鶴蔵を立たせようとして、佐久は何度も足を踏み外し、そのたびに近くにいた義藤が支えていた。

「あ、義藤。ありがとね」

佐久はそんなことを言いながら、小動物のようなからくり師鶴蔵の中に入れようと必死になっていた。義藤は困り果てたように溜め息をつき、助けを求めるように都南に助けを求めている。都南は逃げるように目をそらせていた。紅は手を叩いて笑っていた。

佐久と鶴蔵の押し問答を部外者の悠真は見ている。赤の仲間たちは生き生きとしていた。

「いい加減にして！」

大きな声を上げたのは野江だった。野江は彼女らしくない歩き方で紅や悠真たちの前を横切った。困ったように肩をすばめたのは、都南だった。

「鶴巳、紅が入れて言っているでしょ」

野江は彼を「鶴巳」と呼び、乱暴に彼の腕を掴んで部屋に引き入れた。彼はばらばらと道具を辺りに散らばせて、遠次と義藤の間に座った。義藤がそつと鶴蔵の背中を叩いていたのを悠真は見逃さなかった。

「紹介するわ。彼は鶴巳。通称鶴蔵。空挺丸を作り出した、稀代のからくり師よ」

鶴蔵は困ったように頭を掻いた。埃がばらと畳みに落ちた。

「あつしは鶴巳。鶴蔵と呼ばれています。はい。鶴蔵って言うのは、あつしが紅城へ雇用されるときに名前を鶴三と間違えて書類に書いて、それで字が変わって鶴蔵です。はい。今じゃ、鶴巳と呼ぶんは野江だけです。どうか、鶴蔵と呼んでください」

鶴蔵は口ごもりながら話し、怯えるように畳に額をつけた。拍子に台に頭をぶつけ、鶴蔵を起こすように義藤が手を貸していた。鶴蔵の声は耳をそばだてなければ聞こえないような声。それが鶴蔵の話し方。間違いなく鶴蔵は小さな生き物のような存在だった。野江が溜め息をついた。

「鶴巳は稀代のからくり師よ。からくりの道ならば、右に出る者はいないわ。湯をわかすのに便利な、このからくりも鶴巳が発明したものなの。鶴蔵がいるから各地に散る下緋たちは、安全に職務をこなすことが出来ているのよ。もちろん、中央に残る術士や、あたくしたちも同じ。からくりが、紅の石の使い方幅を大きく広げて、あたくしたちの生活を支えているの」

野江は、まるで自分のことのように鶴蔵を説明していた。悠真は野江だけが鶴蔵を鶴巳と本名で呼ぶ。それが二人の距離を示しているように思えた。思えば、鶴蔵のことを話すとき、野江の雰囲気がつもと異なる。落ち着いた大人の雰囲気、心なしか崩れるのだ。けらけらと紅が楽しそうに笑った。

「野江は鶴蔵のこととなると、自分のことのように話すなあ」

野江をからかって楽しんでいるようだった。

「紅、いい加減にしてください。あたくしを怒らせないでくださいな」

野江が紅に答えて、席に戻ろうとした。

「すみません、すみません。また、野江に迷惑をかけてしまったっす。すみません」

鶴蔵が頭を掻きながら、お辞儀をしていた。鶴蔵は野江のことを気安く名で呼ぶ。佐久にはきちんと敬称を付けていたにも関わらずだ。

「そんなに頭を下げないの」

「すんません」

鶴蔵は頭を掻きながら俯いた。鶴蔵の目は長い前髪に隠されているが、そもそも俯くことが多い鶴蔵の顔を見ることは難しい。

「頭を掻かない」

「すんません」

鶴蔵は体をすぼめて、出来るだけ小さくならうとしているようだった。この場の邪魔にならないように、己の存在を消し去ろうとしているようだ。

「小さくならない」

「すんません」

鶴蔵は困り果てたように、畳を見ていた。

「ちゃんと前を見て」

「すんません」

「謝ってばかりじゃない」

「すんません」

野江と鶴蔵はそんな会話を続けていた。野江の言葉は厳しいようで、少しも鶴蔵を傷つけるような語句を含んでいない。鶴蔵もさほど気にしていないようで、二人の間では当然の掛け合いらしい。悠真はそれを感じながら、野江と鶴蔵を並べてみる事が出来なかった。品の高い野江。ぼさぼさ頭の鶴蔵。「月とすっぽん」とはこのことだ。

「続きは後でしてくれ」

遠次が一つ呟き、野江は照れたように何も言わずに俯いた。

赤の手合わせ（１）

紅城の人々は、個性豊かな人たちだ。いくつもの顔を持ち、気さくに振舞う紅。上品なのに嫌味が多い陽緋の野江。術が使えない朱将の都南。運動音痴で甘味に目が無い佐久。人見知りのからくり師の鶴蔵。彼らを包み込むように見る遠次。彼らは大きな責務を負い、火の国の核となる人たち。本来なら、悠真のような田舎者が言葉を交わすことなど許されない。なのに、言葉を交わすと、彼らも悠真と同じ人間なのだ実感させられるのだ。紅と共に歩むことを決めた赤の仲間たちは、常に紅を気遣っている。きっと、鶴蔵も同じはずだ。

「鶴蔵、いい加減私に慣れる。お前は先代紅の頃から、この紅城にいるんだろ。出会ってから十年。いい加減慣れるよ」

紅が遠次の甘味をつまんでいた。全ては紅の立場と人柄が許される行動なのだろう。

「紅も、色神となって十年。もう、子供じゃないんだ。いい加減落ち着きを持ったらどうだ？」

遠次に甘味に再び手を伸ばした紅の手を、遠次が軽く叩いた。紅は手を引つ込め、頬を膨らませた。

「良いんだ。私は十分がんばっているからな」

まるで子供のように紅は振る舞い笑った。しかし、直後まじめな顔をして悠真を覗き込んだ。

「さて、ふざけるのはこの辺にしておこう。小猿、よく聞け。私には敵が多い。敵が多い私が赤い色を手渡しているのは、紅城に数人いる」

紅がゆつくりと口を開いた。悠真は辺りを見渡し、赤を許された人たちを見た。

「そこにいる遠爺、野江、都南、佐久、義藤。そして鶴蔵。他にも加工師の柴もいるが、奴は今頃どこにいるのやら。紅城にいるのは

彼ら五人。この広い紅城で私が心から信頼できるのは、この五人。小猿、他の人について行くなよ。他の人に一人でついて行って安全だという保障を私はしない」

紅は微笑んだ。赤は美しく、強く、孤独な色。孤独な人たちが身を寄せ合い、仲間となつてゐる。紅たちは互いの孤独を赤で繋げてゐるのだ。

――赤じゃ

一瞬、悠真の視界が赤に包まれた。赤の世界で、夢で会つた赤い女性が浮かんだのだ。

――赤になれ

赤の声が響き、そして消えた。悠真は不気味な感覚を覚えた。赤が悠真を捕らえようとしているように思えたのだ。悠真の一色を赤に染めようとする。

――駄目よ。赤に染まつては駄目。

そのたびに、無色の声が悠真を止めるのだ。赤の仲間は優しく魅力的だけれど、赤に染まるなと言う。悠真はその真意が分からなかった。

赤の色神紅が信頼を寄せる人物が悠真の目の前にいた。彼らは何を思っているのか、悠真には何も分からない。

「夜まではまだ時間があるなあ……」

場の空気を敢えて読んでいないだろう紅が両手を頭の後ろに組み、そのまま畳の上に寝転んだ。そもそも広くない佐久の部屋。多くの人数が集まり、窮屈な部屋の中で紅が寝転ぶから、赤の仲間と悠真は体を縮めるしかなかった。最も怯えているのは鶴蔵だった。

「お止めなさいな。はしたない」

野江が紅を叱責したが、色神紅は何も気にする様子も無く台を蹴りながら足を伸ばした。

「仕方ないだろ。真面目な話をして疲れたんだ。少しぐらいくつろいだって良いだろ」

悠真は紅を見て、それが火の国の色神なのだということが信じられ

なかった。今日、紅に合うまで、色神は高貴な神だと思っていたのに、目の前にいる紅は男勝りで大雑把だ。この人が、色神だと知れば火の国の民の大半は信じる道を失うだろう。そもそも、色神が普通の人間だったということを考えれば、紅が男勝りで大雑把なのは仕方ないのかもしれない。彼女はそういう性格なのだろう。

一つ、溜め息をついたのは義藤だった。紅よりも義藤の方が品が良い。

「野江、都南、一つ頼みがあります」

「何だ？」

義藤の申し出に、都南が訝しそくに目を細めた。

「きつと、今日俺は戦います。その前に、一度手合わせを願えませんか？真剣勝負でお願いします」

義藤が畳に手をつき、浅く頭を下げた。

「それだ、面白そうだな」

紅が手を叩いて喜んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2341x/>

一色

2011年10月26日14時58分発行